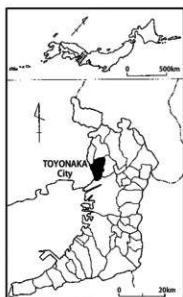


豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

令和元年度（2019 年度）



令和2年（2020年）3月

豊中市教育委員会

序 文

豊中市は、太古より猪名川・神崎川によって育まれた肥沃な平野、千里丘陵にみる里山という好環境のもとに人々の生活の場が育まれました。81 を数える市内の遺跡は、そうした環境のもとで、現在まで多くの歴史的遺産を受け継いできました。

しかし、商都大阪や阪神工業地帯に隣接し、早くから大阪近郊のベッドタウンとしての開発が進められました。そのため、埋蔵文化財の保護につきましても、早急に取り組む必要に迫られるようになりました。近年では、開発の勢いが落ち着いてきたものの、土地利用の形態が変化してきたことを受けて小規模開発が急増し、住宅の老朽化に伴う建て替えも依然として多く、埋蔵文化財保護について迅速な対応が求められています。

本書は郷土の文化財としての埋蔵文化財の重要性をふまえ、国の補助を受けて実施した緊急発掘調査の概要報告です。令和元年度（2019 年度）に行った各遺跡の発掘調査や各遺跡における確認調査の成果をはじめ、平成 30 年度（2018 年度）に調査を実施した曽根遺跡第 14 次調査等の概要も掲載しました。

永きにわたって受け継がれてきた貴重な歴史的遺産は、わたしたち現代に暮らす人間にとっても大切な知識をもたらしてくれます。本書が、郷土豊中の豊かな未来形成のために役立つことを願ってやみません。

調査の実施にあたっては、土地所有者、施工関係者、近隣の住民の皆様に、深いご理解と多大なご協力を賜りました。また文化庁、大阪府教育委員会ならびに関係諸機関には、格別のご指導とご配慮をいただきました。各方面の方々のお力添えにより、豊中市の文化財保護行政が推進できましたことを、ここに厚く感謝いたしますとともに、今後ともより一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。

令和 2 年（2020 年）3 月 31 日

豊中市教育長 岩 元 義 継

例 言

1. 本書は、令和元年度国庫補助事業（総額 12,520,000 円、国庫 50%、市費 50%）として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査の概要報告書である。また、平成 30 年度（2018 年度）に実施した曾根遺跡第 14 次調査・桜塚古墳群第 14 次調査、及び平成 31 年（2019 年）1 月～3 月に実施した確認調査の成果も併せて掲載した。
2. 令和元年度事業として平成 31 年（2019 年）4 月 1 日から令和 2 年（2020 年）3 月 31 日まで、発掘調査ならびに整理作業を実施した。
3. 発掘調査は、豊中市教育委員会事務局 社会教育課 文化財保護係が実施した。
4. 本書のうち、第Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ章は橘田が、第Ⅲ章は小堀が、第Ⅴ章は服部が執筆した。また、第Ⅵ章は各調査担当者の見解をもとに、浅田が執筆した。なお、全体の編集を橘田が行なった。
5. 各挿図に掲載した方位表記のうち、M、N は磁北、また表記のないものは国土座標系（第Ⅵ系）に基づく座標北を示す。
6. 挿図・本文中の土色表記の基準は、『新版標準土色帖 2010 年版』に基づく。
7. 各調査地の土地所有者、施工業者ならびに近隣住民の方々には、文化財の保護に対して深いご理解とご協力をいただきました。併せてここに明記し、深謝いたします。

平成 30 年度（2018 年度）発掘調査一覧

遺跡名	回数	調査地	調査面積	担当者	調査期間
曾根遺跡	第 14 次	豊中市曾根西町 3 丁目 212・213	291.61 ㎡	橘田 正徳	平成 30 年（2018 年） 8 月 1 日～9 月 26 日
桜塚古墳群	第 14 次	豊中市中桜塚 2 丁目 118－5	40.0 ㎡	小堀 僚	平成 31 年（2019 年） 2 月 18 日～3 月 15 日

令和元年度（2019 年度）発掘調査一覧

遺跡名	回数	調査地	調査面積	担当者	調査期間
北刀根山遺跡	第 2 次	豊中市刀根山元町 175・175－2・176 の各一部	54.94 ㎡	橘田 正徳	令和元年（2019 年） 5 月 13 日～6 月 4 日
新免遺跡	第 73 次	豊中市玉井町 3 丁目 60	31.36 ㎡	服部 聡志	令和元年（2019 年） 5 月 27 日～6 月 14 日

目 次

第Ⅰ章 位置と環境	(橘 田)
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1
第Ⅱ章 曽根遺跡第14次調査	(橘 田)
1. 調査の経緯	5
2. 調査の概要	5
(1) 基本層序	5
(2) 検出した遺構と出土遺物	6
3. まとめ	25
第Ⅲ章 板塚古墳群第14次調査	(小 堀)
1. 調査の経緯	27
2. 調査の成果	27
(1) 遺跡の概要	27
(2) 基本層序	28
(3) 検出した遺構と出土遺物	28
3. まとめ	28
第Ⅳ章 北刀根山遺跡第2次調査	(橘 田)
1. 調査の経緯	31
2. 調査の概要	32
(1) 基本層序	32
(2) 検出した遺構と出土遺物	32
3. まとめ	34
第Ⅴ章 新免遺跡第73次調査	(服 部)
1. 調査の経緯	35
2. 遺跡の概要	36
3. 調査の成果	36
(1) 第1トレンチ	36
(2) 第2トレンチ	38
4. まとめ	43

挿図・表目次

(第Ⅰ章 位置と環境)

第1図 市内遺跡分布図	3
第2図 調査地点と周辺の地形	4

(第Ⅱ章 曾根遺跡第14次調査)

第3図 調査範囲図	5
第4図 調査地位置図	5
第5図 建物1出土遺物	6
第6図 建物1平面・断面図	6
第7図 調査区平面・断面図	7～8
第8図 建物2平面図	9
第9図 柱穴出土遺物	9
第10図 住居1平面・断面図	10
第11図 住居1出土遺物	11
第12図 土坑1出土遺物	11
第13図 土坑1平面・断面図	11
第14図 土坑2平面・断面図	12
第15図 土坑2出土遺物	12
第16図 土坑3平面・断面図	13
第17図 土坑3出土遺物 1	13
第18図 土坑3出土遺物 2	14
第19図 土坑4平面・断面図	15
第20図 土坑4出土遺物 1	16
第21図 土坑4出土遺物 2	16
第22図 溝1断面図	17
第23図 溝1上層出土遺物	18
第24図 溝1中～下層出土遺物 1	19
第25図 溝1中～下層出土遺物 2	20
第26図 溝1中～下層出土遺物 3	21
第27図 溝2断面図	21

第28図	溝2出土遺物	22
第29図	溝3東部出土遺物	22
第30図	溝3西部出土遺物	22
第31図	溝3断面図	23
第32図	溝3-1・2出土遺物	24
第33図	溝3-3出土遺物	24
第34図	溝4出土遺物	25

(第Ⅲ章 桜塚古墳群第14次調査)

第35図	調査範囲図	27
第36図	調査地位置図	27
第37図	調査区平面・断面図	29

(第Ⅳ章 北刀根山遺跡第2次調査)

第38図	調査範囲図	31
第39図	調査地位置図	31
第40図	調査区平面・断面図	32
第41図	土坑群2断面図	33
第42図	出土遺物	33

(第Ⅴ章 新免遺跡第73次調査)

第43図	調査範囲図	35
第44図	調査地位置図	35
第45図	全体平面図	36
第46図	第1トレンチ平面・断面図	37
第47図	第1トレンチ出土遺物	38
第48図	第2トレンチ 第1面 平面図・遺構断面図	38
第49図	第2トレンチ 第2面 平面・断面図	39
第50図	第2トレンチ出土遺物	40
第51図	第1トレンチ 遺構断面図	41
第52図	第2トレンチ 第2面 遺構断面図	42
第53図	石器実測図	43

(第Ⅵ章 確認調査の成果)

第1表	令和元年(2019年)確認調査一覧表	45・46
第54図	確認調査地点位置図	47
第55図	トレンチ掘削状況	48

第 56 図	トレンチ断面図	48
第 57 図	トレンチ掘削状況	48
第 58 図	トレンチ平面・断面図	48
第 59 図	トレンチ掘削状況	48
第 60 図	トレンチ断面図	48
第 61 図	トレンチ掘削状況	49
第 62 図	トレンチ断面図	49
第 63 図	トレンチ掘削状況	49
第 64 図	トレンチ断面図	49
第 65 図	トレンチ掘削状況	49
第 66 図	トレンチ断面図	49
第 67 図	トレンチ掘削状況	50
第 68 図	トレンチ断面図	50
第 69 図	トレンチ掘削状況	50
第 70 図	トレンチ断面図	50
第 71 図	トレンチ掘削状況	50
第 72 図	トレンチ平面・断面図	50
第 73 図	トレンチ掘削状況	51
第 74 図	トレンチ断面図	51
第 75 図	トレンチ掘削状況	51
第 76 図	トレンチ断面図	51
第 77 図	トレンチ掘削状況	51
第 78 図	トレンチ断面図	51
第 79 図	トレンチ掘削状況	52
第 80 図	トレンチ断面図	52
第 81 図	トレンチ掘削状況	52
第 82 図	トレンチ平面・断面図	52
第 83 図	トレンチ掘削状況	52
第 84 図	トレンチ平面・断面図	52
第 85 図	トレンチ掘削状況	53
第 86 図	トレンチ断面図	53
第 87 図	トレンチ掘削状況	53
第 88 図	トレンチ断面図	53
第 89 図	トレンチ掘削状況	53
第 90 図	トレンチ断面図	53
第 91 図	トレンチ掘削状況	54
第 92 図	トレンチ断面図	54
第 93 図	トレンチ掘削状況	54

第 94 図	トレンチ断面図	54
第 95 図	トレンチ掘削状況	54
第 96 図	トレンチ断面図	54
第 97 図	トレンチ掘削状況	55
第 98 図	トレンチ断面図	55
第 99 図	トレンチ掘削状況	55
第 100 図	トレンチ断面図	55
第 101 図	トレンチ掘削状況	55
第 102 図	トレンチ断面図	55
第 103 図	トレンチ掘削状況	56
第 104 図	トレンチ断面図	56
第 105 図	トレンチ掘削状況	56
第 106 図	トレンチ断面図	56
第 107 図	トレンチ掘削状況	56
第 108 図	トレンチ断面図	56
第 109 図	トレンチ掘削状況	57
第 110 図	トレンチ断面図	57
第 111 図	トレンチ掘削状況	57
第 112 図	トレンチ断面図	57
第 113 図	トレンチ掘削状況	57
第 114 図	トレンチ平面・断面図	57
第 115 図	トレンチ掘削状況	58
第 116 図	トレンチ断面図	58
第 117 図	トレンチ掘削状況	58
第 118 図	トレンチ断面図	58
第 119 図	トレンチ断面図	58
第 120 図	トレンチ掘削状況	59
第 121 図	トレンチ断面図	59
第 122 図	トレンチ掘削状況	59
第 123 図	トレンチ断面図	59
第 124 図	トレンチ掘削状況	59
第 125 図	トレンチ断面図	59
第 126 図	トレンチ掘削状況	60
第 127 図	トレンチ断面図	60
第 128 図	トレンチ掘削状況	60
第 129 図	トレンチ断面図	60
第 130 図	トレンチ掘削状況	60

第 131 図	トレンチ断面図	60
第 132 図	トレンチ掘削状況	61
第 133 図	トレンチ平面・断面図	61
第 134 図	トレンチ掘削状況	61
第 135 図	トレンチ断面図	61
第 136 図	トレンチ掘削状況	61
第 137 図	トレンチ断面図	61
第 138 図	トレンチ掘削状況	62
第 139 図	トレンチ平面・断面図	62
第 140 図	トレンチ位置図	62
第 141 図	トレンチ掘削状況	63
第 142 図	トレンチ断面図	63
第 143 図	トレンチ掘削状況	63
第 144 図	トレンチ断面図	63
第 145 図	トレンチ掘削状況	63
第 146 図	トレンチ断面図	63
第 147 図	トレンチ掘削状況	64
第 148 図	トレンチ断面図	64
第 149 図	トレンチ掘削状況	64
第 150 図	トレンチ断面図	64
第 151 図	トレンチ掘削状況	64
第 152 図	トレンチ断面図	64
第 153 図	トレンチ掘削状況	65
第 154 図	トレンチ断面図	65
第 155 図	トレンチ掘削状況	65
第 156 図	トレンチ断面図	65
第 157 図	トレンチ掘削状況	65
第 158 図	トレンチ断面図	65
第 159 図	トレンチ掘削状況	66
第 160 図	トレンチ断面図	66
第 161 図	トレンチ掘削状況	66
第 162 図	トレンチ断面図	66
第 163 図	トレンチ掘削状況	66
第 164 図	トレンチ断面図	66
第 165 図	トレンチ掘削状況	67
第 166 図	トレンチ断面図	67
第 167 図	トレンチ掘削状況	67
第 168 図	トレンチ断面図	67

第 169 図	トレンチ掘削状況	67
第 170 図	トレンチ断面図	67
第 171 図	トレンチ掘削状況	68
第 172 図	トレンチ断面図	68
第 173 図	トレンチ掘削状況	68
第 174 図	トレンチ断面図	68
第 175 図	トレンチ掘削状況	68
第 176 図	トレンチ断面図	68
第 177 図	トレンチ掘削状況	69
第 178 図	トレンチ断面図	69
第 179 図	トレンチ掘削状況	69
第 180 図	トレンチ断面図	69
第 181 図	トレンチ掘削状況	69
第 182 図	トレンチ断面図	69
第 183 図	トレンチ掘削状況	70
第 184 図	トレンチ断面図	70
第 185 図	トレンチ掘削状況	70
第 186 図	トレンチ断面図	70
第 187 図	トレンチ掘削状況	70
第 188 図	トレンチ断面図	70
第 189 図	トレンチ掘削状況	71
第 190 図	トレンチ断面図	71
第 191 図	トレンチ掘削状況	71
第 192 図	トレンチ断面図	71
第 193 図	トレンチ掘削状況	71
第 194 図	トレンチ断面図	71
第 195 図	トレンチ掘削状況	72
第 196 図	トレンチ断面図	72
第 197 図	トレンチ掘削状況	72
第 198 図	トレンチ断面図	72

図版目次

図版1 曾根遺跡第14次調査1

- (1) 調査区全景

図版2 曾根遺跡第14次調査2

- (1) 建物1
- (2) SP-1 (建物1柱穴)

図版3 曾根遺跡第14次調査3

- (1) 住居1
- (2) 住居1土層断面1
- (3) 住居1土層断面2 (南壁面拡大)

図版4 曾根遺跡第14次調査4

- (1) 土坑3
- (2) 土坑4土層断面

図版5 曾根遺跡第14次調査5

- (1) 溝1
- (2) 溝1土層断面

図版6 曾根遺跡第14次調査6

- (1) 溝1遺物出土状況1
- (2) 溝1遺物出土状況2

図版7 曾根遺跡第14次調査7

- (1) 溝2土層断面
- (2) 溝3土層断面

図版8 桜塚古墳群第14次調査1

- (1) 調査区全景1 (北区)
- (2) 調査区全景2 (南区)

図版9 桜塚古墳群第14次調査2

- (1) SP1・SP2土層断面
- (2) 溝1土層断面

図版10 北刀根山遺跡第2次調査1

- (1) 調査区全景1 (北区)
- (2) 調査区全景2 (南区)

図版11 北刀根山遺跡第2次調査2

- (1) 土坑群2土層断面
- (2) SP-3土層断面

図版12 新免遺跡第73次調査1

- (1) 第1トレンチ全景 (掘削前)
- (2) 第1トレンチ 土坑1土層断面
- (3) 第1トレンチ SP-9土層断面
- (4) 第1トレンチ 井戸1
- (5) 第1トレンチ全景 (掘削後)

図版13 新免遺跡第73次調査2

- (1) 第2トレンチ第1面全景 (南から)
- (2) 第2トレンチ第1面全景 (西から)
- (3) 第2トレンチ第1面 溝1土層断面
- (4) 第2トレンチ第1面 土坑1

図版 14 新免遺跡第 73 次調査 3

- (1) 第 2 トレンチ 第 2 面 全景(掘削前)
- (2) 第 2 トレンチ 第 2 面 全景(掘削後)

図版 15 新免遺跡第 73 次調査 4

- (1) 第 1 トレンチ 土坑 1 出土遺物
- (2) 第 1 トレンチ SP・9 出土遺物
- (3) 第 2 トレンチ 溝 1 出土遺物
- (4) 第 2 トレンチ 溝 2 出土遺物

図版 16 新免遺跡第 73 次調査 5

- (1) 第 2 トレンチ 土坑 1 出土遺物
- (2) 第 2 トレンチ 土坑 2 出土遺物

図版 17 新免遺跡第 73 次調査 6

- (1) 第 2 トレンチ 土坑 2 出土遺物
- (2) その他の土器
- (3) 石器

第1章 位置と環境

1. 地理的環境

豊中市は旧国名では摂津国に属し、西は猪名川を挟んで兵庫県と、また南は神崎川を挟んで大阪市に接する位置にある。市域の西・南を画する二つの大河川は豊中市南西端で合流し、そして大阪湾へと流れ込む。そうした神崎川河口一帯は古くより難波江・河尻と呼ばれ、瀬戸内水運の東極として神崎川・淀川水運と中継する交通の要衝であった。その後背部に位置する豊中市は、水運等の広域流通網の恩恵を受けて発展してきた。さらに、16世紀以降は大坂近郊という環境のもと、市域の農村は商品作物の栽培を行うことで極めて安定的に展開する。そして、明治43年(1910年)の箕面有馬電気軌道(現在の阪急電鉄宝塚線)開通を契機に宅地化が進み、現在では約36.6km²の市域に約40万人が暮らす住宅都市となっている。

その一方で、大阪市街の発展とともに、その玄関口にあたる本市には名神高速道路や阪神高速道路といった幹線道路や大阪国際空港など、陸空の交通機関が整備され、近代交通網においても要衝の位置にあると言える。

一方、豊中市域の地形的特徴をみると、北から南に向かって標高が低くなること、起伏の乏しい穏やかな地形が指摘できる。市内北部の最高地点である島熊山(海拔約100m)から最も低い大島町付近(海拔1m以下)にかけての高低差は、およそ100mにとどまる。その市北部には千里丘陵と刀根山丘陵などの丘陵が、中部は主に千里丘陵から派生する中～低位段丘を中心とした豊中台地が、南西部は神崎川・猪名川、その支流である天竺川などの小河川の沖積作用によって形成された平野部といった、巨視的にみて三つの地形に区分できる。ところで、平野部については、庄本から神崎川・高川合流点をつなぐ京街道を境に、その南は奈良末施行地帯となっており、地割りの形態によって細分できる。また、穂積村開堤と野田村・島田村の堤防に挟まれた字「鯉ヶ淵」・「不毛」などの一帯や庄本北東の字「西大寺」から旧猪名川へ流れ込む埋没河川が知られるように、平野南部は複雑な地形環境にあった。

今回報告する北刀根山遺跡は刀根山丘陵頂部付近、新免遺跡は豊中台地に、曽根遺跡は豊中台地南端部の舌状丘陵に立地する。

2. 歴史的環境

ここでは本書で報告する各遺跡の変遷について、集落の動向を中心に述べていく。

北刀根山遺跡 当遺跡は刀根山丘陵頂部一帯に展開する集落遺跡で、中世の集落遺跡として周知されている。また、当遺跡の中心部付近に位置する常楽寺は、かつて刀根山御坊と呼ばれ、戦国時代には真宗派の拠点であった可能性がある。一方、『信長公記』によると天正6～7年(1578～1579年)の荒木村重の乱に際して、荒木村重が籠もる伊丹有岡城を包囲する陣城の一つに刀根山城があったことが記されている。しかし、刀根山城の位置については、現時点で特定できていない。

ところで、常楽寺の南隣で行われた第1次調査では16世紀後半の埋塞遺構が発見され、またその東隣で行われた住宅建築に伴う確認調査では焼土層直下から備前焼の破片で護岸した側溝などが検出されている。これらの遺構は通常の集落遺跡ではみられないもので、常楽寺一帯が都市的な様相を帯びている空間であったことを示唆している。

なお、今回の調査区は、常楽寺の南方、第1次調査区の西隣に位置しており、調査では刀根山城に関連する遺構が確認されるものと予想された。

新免遺跡 豊中台地北部に展開し、縄文～中世の集落遺跡として知られている。本格的な集落が展開するのは弥生時代中期で、この時期に展開する豊中市北部の集落の中では最大の規模を有することが、これまでの発掘調査によって明らかにされている。また、その周囲の本町遺跡や岡町北遺跡で出現する中期後

半の集落は、新免遺跡から派生したと考えられるなど、豊中台地における中心的集落といえる。この集落は、古墳時代前期から衰退しはじめるが、後期になると桜井谷遺跡群の操業とともに須恵器集散地として再び盛期を迎える。その後、奈良時代頃まで継続するものの、平安時代前期には散村となって、その後の集落に関する動向は追跡できなくなる。

今回の調査区の周囲は、これまでの発掘調査で各時代の遺構が多く検出されており、各時期にわたる多数の遺構等が確認されると予想された。

桜塚古墳群（岡町遺跡） 当古墳群は大石塚・小石塚古墳を中心とする西群と大塚・御獅子塚古墳を中心とする東群の2群、それに嫁廻塚古墳等の南群によって構成される。ただし、今回の調査で確認された遺構は柱六等の集落関連であり、岡町遺跡の一部として認識される内容である。よって、ここでは岡町遺跡の概要を述べる。

岡町遺跡は、豊中台地中央部に展開する中世の集落遺跡である。遺跡内に立地する瑞輪寺は、春日大社南郷目代今西氏に伝来する「文治五年田畠検注帳」（『今西家文書』）に記されている「桜塚山」「善光寺」に、また遺跡西方の原田神社は「牛頭天王社」に比定されている。これまでの調査では、瑞輪寺西方に濃密な遺構が確認され、原田神社東方では多量の焼土を埋土とした中世後期の溝などが確認され、善光寺門前に展開する流通拠点としての性格も考慮する必要が生じている。

今回の調査区は岡町遺跡の西方にあるが、善光寺・牛頭天王社門前の外周付近に位置すると推測できることから、これらに関する集落関連遺構が確認されると予想された。

曾根遺跡 豊中台地南西から派生する舌状丘陵上に展開し、弥生時代～中世の集落遺跡として知られている。当遺跡における集落は弥生時代中期に出現し、終末期に盛期を迎える。本町遺跡や岡町北遺跡など、豊中台地北部の集落は古墳時代前期に衰退するが、当遺跡は古墳時代も堅調に推移する。奈良時代における集落の様相は判然としなが、倉庫を伴う建物群が第1次調査で確認されている。

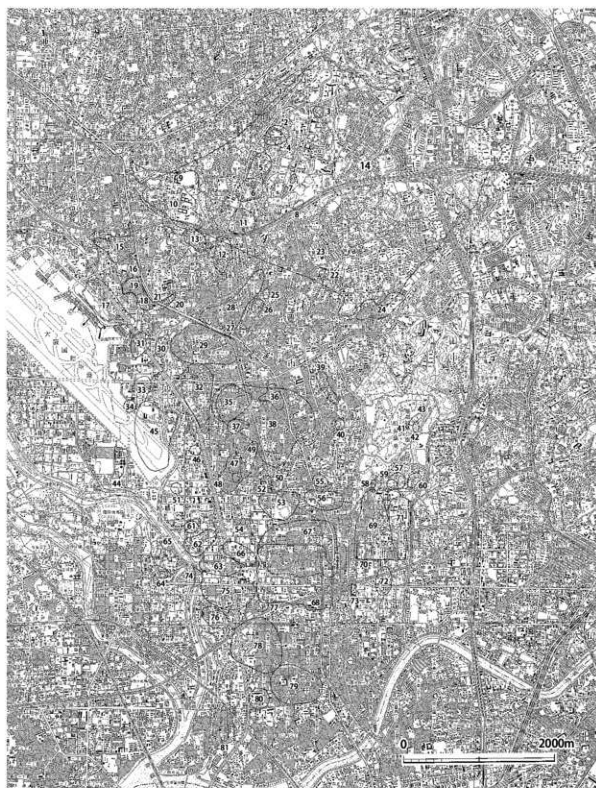
当遺跡が大きく変化するの、平安時代である。それまでの掘立柱建物の主軸方向は北東方向を主体としていたが、10世紀前半からは真北方向を意識しはじめるようになる。また、この時期に北方の岡町南遺跡では大型の掘立柱建物を中心とする建物群から鈎帯が出土するなど、周囲の遺跡でも官衙との関連が認められるようになる。

そして、10世紀前半には第1・5・8次調査区の一帯において、南北140m、東西100m以上の範囲に、L字状もしくはコの字状に大型建物と倉庫を配置する建物群が出現する。前代の官衙政庁の区画が1辺50m程度の規模になるのに対して、この建物群の規模はそれを大きく上回る。この建物群は、2面底及び4面底をはじめとする100m前後の掘立柱建物や、3間四方の総柱という規模・構造の倉庫といった単体でも傑出した建物で構成されており、その内容も他の大型建物群に類例がない¹⁾。このことから、この建物群は「超」大型建物群と呼ぶにふさわしい。なお、この建物群は11世紀前半頃に廃絶し、その後11世紀後半には中世前期の集落が展開する。

今回の調査区は、その建物群の区画中央付近に位置しており、弥生時代から中世にいたる各時代の遺構はもとより、これに関する遺構等が確認されるものと予想された。

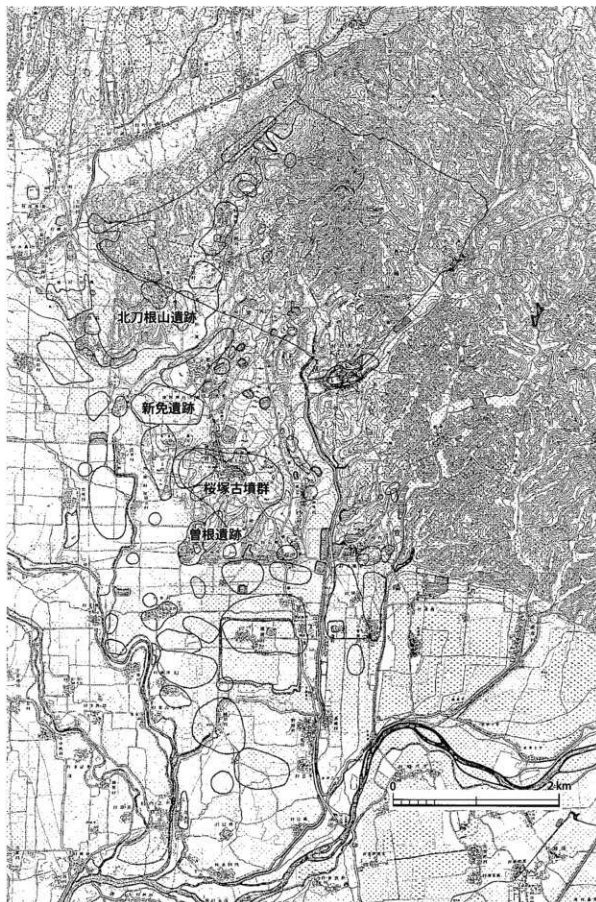
【注】

1. 建物群の時期・配置等の特徴が類似する大島島田遺跡（宮崎県埋蔵文化財センター『国指定史跡 大島島田遺跡』2008年）でも、建物群の範囲（区画）は南北90m前後、東西58m以上にどまり、さらに中心の建物以外に大型のものはない。そのほか、各地で確認されている平安時代の大型建物群の区画は一般的に1辺50m前後であり、池内遺跡（財団法人 大阪府文化財センター『池内遺跡』2010年）の東西70mを最大とする。建物群を構成する建物のうち、主屋が100m前後になる以外に大型のものはない。問題は、10世紀後半までに官衙および相当する施設がほぼ廃絶するという一般的な所見にしたがった場合、11世紀前半頃まで継続する当遺跡の建物群に官衙的性格を付与できない点にある。



- | | | | | | | | |
|----------------|----------------|------------|------------|---------------|------------|------------|-------------|
| 1. 太郎塚古墳群 | 11. 内田遺跡 | 22. 上野遺跡 | 32. 山ノ上遺跡 | 43. 大坂城跡前奉行支配 | 53. 菅野城跡 | 63. 利倉市道跡 | 73. 上総岡野遺跡 |
| 2. 野島春日町古墳群 | 12. 泉原遺跡 | 23. 在池古墳 | 33. 熊取北遺跡 | 44. 熊取城跡 | 54. 菅島北遺跡 | 64. 利倉西遺跡 | 74. 保科氏武井陣跡 |
| 3. 野島遺跡 | 13. 北力塚山遺跡 | 24. 徳田山遺跡 | 34. 北井遺跡 | 45. 熊取西遺跡 | 55. 菅野南遺跡 | 65. 熊野の宮遺跡 | 75. 上津島山遺跡 |
| 4. 野島春日町遺跡 | 14. 野島春日町遺跡 | 25. 金谷寺遺跡 | 35. 熊取北遺跡群 | 46. 熊取東遺跡 | 56. 菅野東遺跡 | 66. 熊野の宮遺跡 | 76. 上津島山遺跡 |
| 5. 少部遺跡 | 15. 熊取北(西の首)遺跡 | 26. 熊取山古墳群 | 36. 熊取山遺跡 | 47. 熊取山遺跡(北城) | 57. 菅野南遺跡 | 67. 熊野の宮遺跡 | 77. 熊野の宮遺跡 |
| 6. 武蔵岡野遺跡(熊取氏) | 16. 熊取山遺跡 | 27. 金谷寺寺域跡 | 37. 熊取山遺跡 | 48. 熊取山遺跡(南城) | 58. 石蔵寺跡 | 68. 熊野の宮遺跡 | 78. 熊野の宮遺跡 |
| 7. 熊取山遺跡 | 17. 熊取山遺跡 | 28. 熊取山遺跡 | 38. 熊取山遺跡 | 49. 熊取山遺跡 | 59. 石蔵寺跡 | 69. 熊野の宮遺跡 | 79. 熊野の宮遺跡 |
| 8. 熊取山遺跡 | 18. 熊取山遺跡 | 29. 熊取山遺跡 | 39. 熊取山遺跡 | 50. 熊取山遺跡 | 60. 熊野の宮遺跡 | 70. 熊野の宮遺跡 | 80. 熊野の宮遺跡 |
| 9. 熊取山遺跡 | 19. 熊取山遺跡 | 30. 熊取山遺跡 | 40. 熊取山遺跡 | 61. 熊野の宮遺跡 | 71. 熊野の宮遺跡 | 81. 熊野の宮遺跡 | |
| 10. 熊取山遺跡 | 20. 熊取山遺跡 | 31. 熊取山遺跡 | 41. 熊取山遺跡 | 62. 熊野の宮遺跡 | 72. 熊野の宮遺跡 | | |

第1図 市内遺跡分布図



第2図 調査地点と周辺の地形

第Ⅱ章 曽根遺跡第14次調査

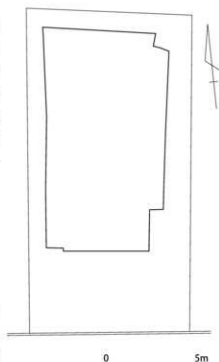
1. 調査の経緯

平成30年(2018年)4月26日に提出された土木工事等に伴う埋蔵文化財発掘の届出に基づき、同年5月16日に確認調査を実施した。この結果、現地表下5～30cmのところで基盤層を確認し、その直上で土坑等の遺構を確認した。一方、計画中の建物の基礎の掘削深度は約1.5mで、計画を変更する余地がないことから、記録保存のための発掘調査を行う必要が生じた。なお、事業者は小規模な零細事業者に該当するため、発掘調査にかかる一部の費用を補助することとなった。

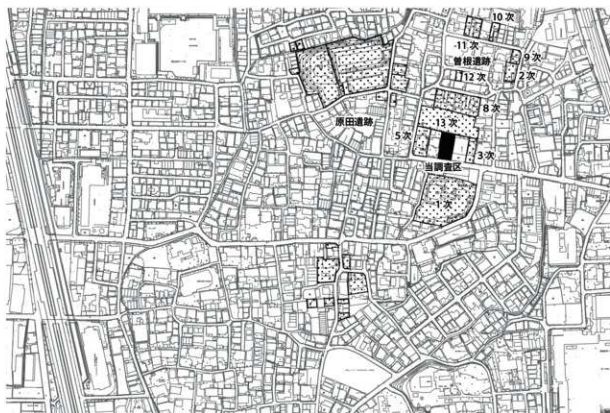
2. 調査の概要

(1) 基本層序

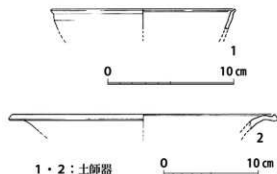
当調査区は、既設建物の基礎や埋設管により、現地表下50cm近くまで攪乱されており、耕作土等は確認されなかった。また、包含層なども削平され、遺構は建物基礎などの攪乱の直下、段丘の上層を構成する黄褐色シルト～粘土層の上面で検出された。



第3図 調査範囲図 (1/200)



第4図 調査地位位置図 (1/5,000)



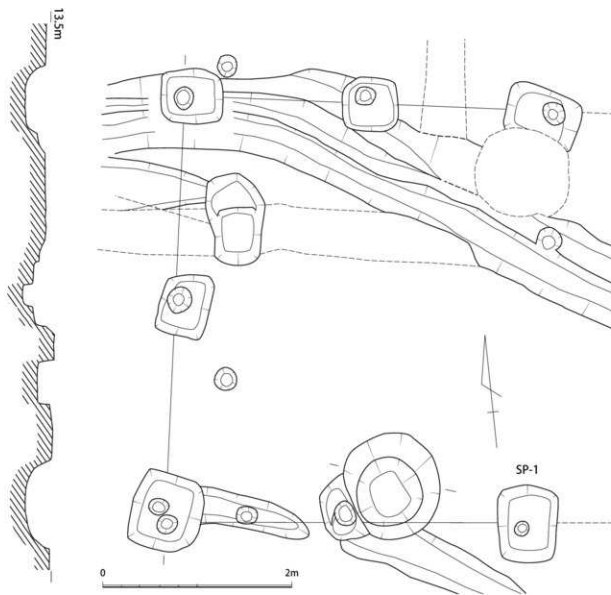
第5図 建物1出土遺物
(1: 1/3 2: 1/4)

(2) 検出した遺構と出土遺物

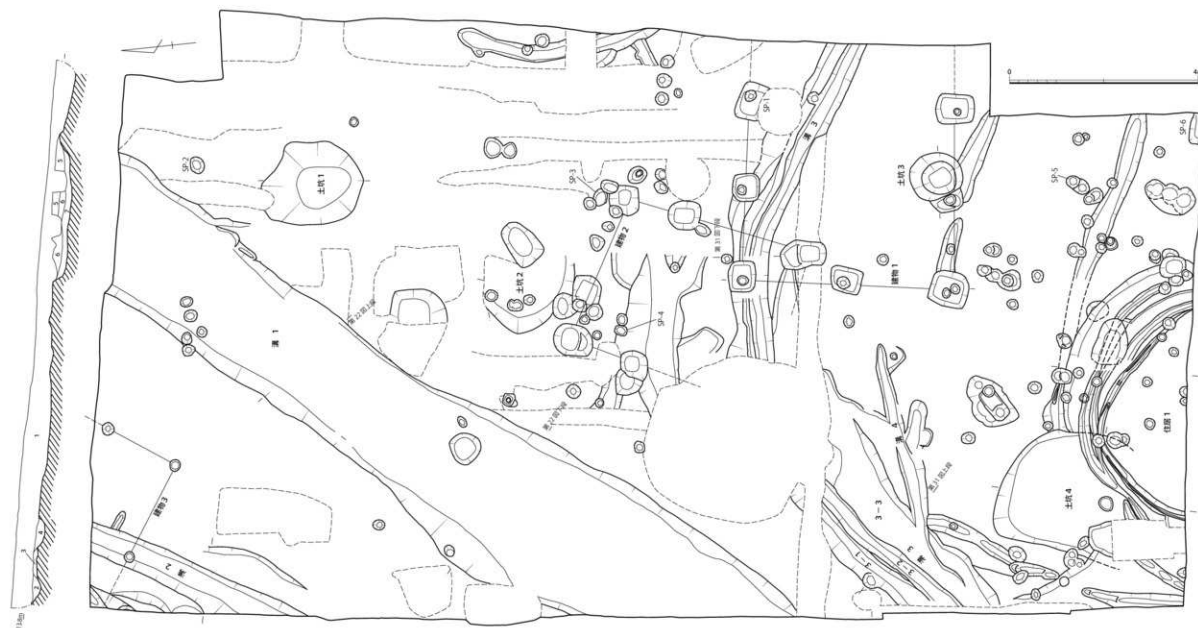
建物1 調査区の中央部に検出した。梁行2間(4.5 m)×桁行2間(4.0 m)以上の側柱建物で、主軸方向はN-12°-Eである。柱間は梁行で2.1・2.4 m、桁行で1.8～2.0 m、建築面積は18.0㎡以上をはかる。柱穴は1辺0.6 m前後、深さは四隅のものが0.3 m前後、それ以外は0.25 mをはかる。使用された柱は、柱穴の断面や基底面に残る痕跡から、直径20～30cm程度と推定される。

建物1を構成するSP-1からは、第5図の遺物が出土した。

1は、土師器杯である。口径は14.8cmに復元され、残存高は1.6cmをはかる。器面は風化しており、調整は明瞭ではないが、ナデの可能性がある。口縁部は、端部の上面に沈線が施すことで外反する。2は、

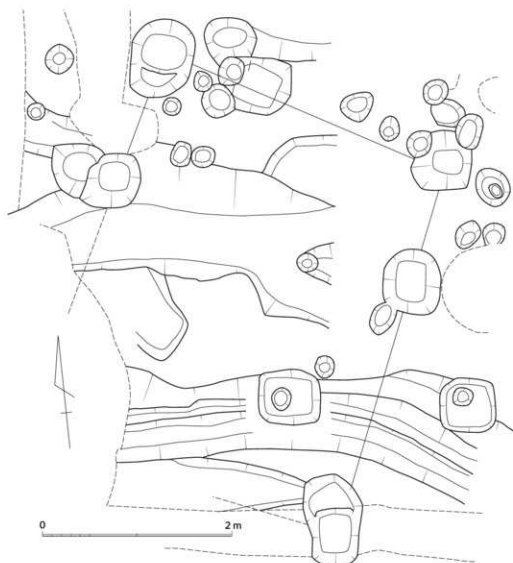


第6図 建物1平面・断面図(1/40)



第7図 調査区平面・断面図 (1/80)

- | | | |
|-------------------------------------|------------------------------------|---|
| 1. 盛土 | 4. 暗褐色 (10YR3/3) 細～極細粒砂 土器細片を少量含む。 | 7. 黒褐色 (2.5Y3/1) 極細粒砂 基盤層を母材とする偽礫を少量含む。 |
| 2. 黒褐色 (10YR3/2) シルト～極細粒砂 土器片を含む。 | 5. 黒褐色 (7.5YR3/1) 極細粒砂 | |
| 3. 灰黄褐色 (10YR4/2) 極細～細粒砂 土器細片を少量含む。 | 6. 黒褐色 (2.5Y3/1) 極細粒砂 | |

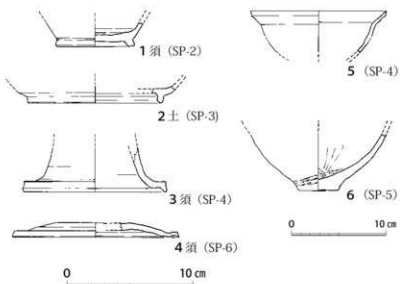


第8図 建物2平面図 (1/40)

土師器甕の口縁部である。口径は28.5cmに復元され、残存高は1.5cmをはかる。口縁部は外反し、端部はほぼ垂直につまみ上げられる。

建物1は、主軸方向の方位が第1次・第5次・第8次調査区で確認された大型建物と共通することから、その建物群の一部を構成すると考えられる。一方、出土した遺物は都城系の土師器で9世紀前半頃までの所産であるが、細片であることから、これらの遺物は混入品の可能性がある。

建物2 調査区の中央部で検出した。梁行1間(3.3m)、桁



第9図 柱穴出土遺物 (1~4: 1/3 5・6: 1/4)

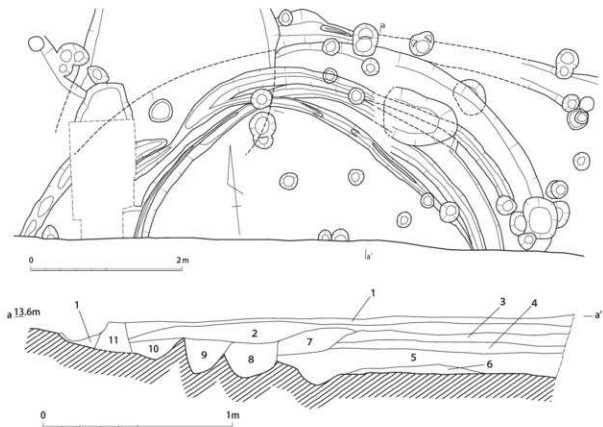
行2間(4.1 m)の側柱建物で、主軸方向はN-26°-Eである。東側の桁行をみると、柱間の間隔が一定ではない。南東端・北西端の柱穴などは重複しており、柱の差し替えが想定できる。使用された柱は、柱穴の断面等から20cm前後と推測される。建築面積は、13.5㎡をはかる。

建物2を構成する柱穴からは、実測できるほどの遺物は出土していないが、9～10世紀頃と考えられる土師器・須恵器・灰釉陶器の細片が出土している。

その他の柱穴 調査区から多数の柱穴が検出されたが、確実に建物に復元できたのは、建物1・2だけであり、建物3についてはその可能性があるだけにとどまる。これら柱穴から出土した遺物を、第9図に掲載した。

1は、SP-2から出土した須恵器小型甕の底部である。高台径は6.0cmに復元され、残存高は1.9cmをはかる。高台は断面四角形を呈し、やや外側に張り出す。体部および底部の外面にはヘラケズリを、内面には回転ナデが施される。2は、SP-3から出土した土師器杯である。高台径は10.4cmに復元され、残存高は1.3cmをはかる。高台の周囲には、横ナデが施されている。3は、SP-4から出土した須恵器高杯の脚部である。裾部径は11.3cmに復元され、残存高は3.5cmをはかる。裾部の端部下端を拡張し、側面を形成する。4は、SP-6から出土した須恵器蓋である。口径は13.2cmに復元され、残存高は1.1cmをはかる。口縁部には回転ナデを施すが、天井部の外面の調整は不明である。5は、SP-4から出土した弥生土器鉢である。底部径4.4cm、残存高6.1cmをはかる。底部外面にはタタキの後にヘラミガキを、内面にはハケを施す。6は、SP-5から出土した弥生土器鉢である。口径は14.2cmに復元され、残存高は4.4cmをはかる。器面は摩耗しており、調整は不明である。

住居1 調査区南端部に検出した円形の竪穴住居で、検出部南端で直径5.6 m以上をはかる。住居の西



1. 褐灰色(7.5YR4/1) 極細～細粒砂 焼土・炭を多く含む。土器片を含む。

2～6. 基盤層を母材とする礫層に褐灰色(10YR5/1)シルトを少量含む。土器細片を極少量含む。(貼り床となる整地層) 各層の境に、層厚5mm前後の褐灰色(7.5YR4/1) 極細粒砂～シルト層が堆積する。

7. 褐灰色(7.5YR4/1) 極細粒砂 基盤層を母材とする礫層を多く含む。

8～10. 基盤層を母材とする礫層に、褐灰色(5YR4/1) 極細粒砂を含む。

11. 褐灰色(5YR4/1) 極細粒砂～シルト 土器大型片を含む。

第10図 住居1平面・断面図(平面:1/50 断面:1/20)



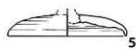
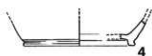
0 10 cm

第11図 住居1出土遺物 (1/4)

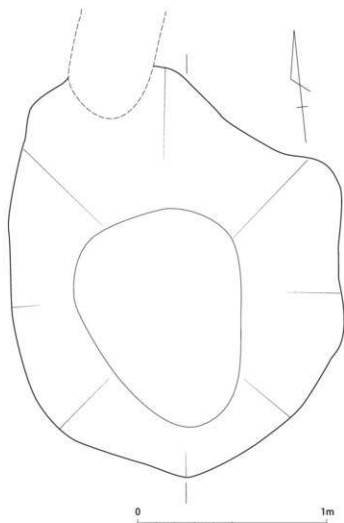
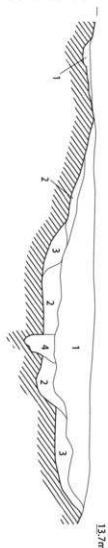


0 10 cm

第12図 土坑1出土遺物 (1/3)



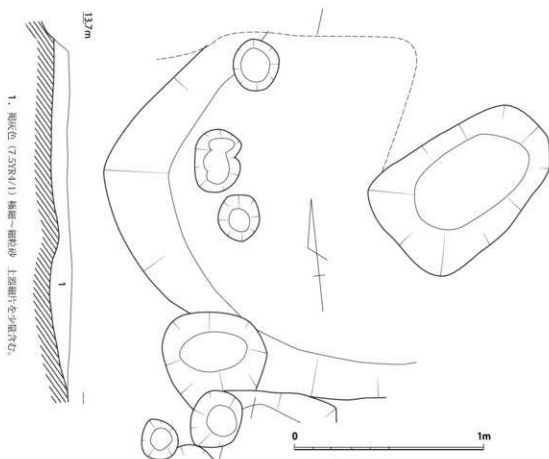
1~3・6:土師器
4・5:須恵器



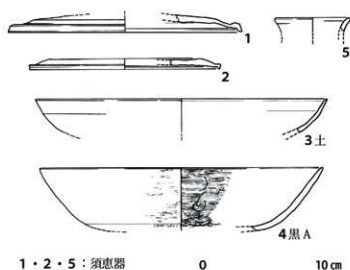
1. 褐灰色 (10YR4/1) 極細粒砂 土器片を極少量含む。
2. 褐色 (10YR4/4) 極細粒砂 基盤層を母材とする偽礫を多く含む。
3. にぶい黄褐色 (10YR5/3) ~ 褐灰色 (10YR6/1) シルト

- ト ~ 極細粒砂 基盤層を母材とする偽礫を含む。土器片を極少量含む。
4. 褐灰色 (10YR6/1) シルト 基盤層を母材とする偽礫を多く含む。

第13図 土坑1平面・断面図 (1/20)



第14図 土坑2平面・断面図 (1/20)



第15図 土坑2出土遺物 (1/3)

側は土坑4と近現代の埋設物により削平されているため、西端の状況は明確ではない。

住居の基底面までの深さは検出面から0.3mで、この間に5層の貼床が確認された。また、壁溝は基底面上で4条ほど検出されているが、外周にむかって拡大している傾向が認められるとともに、貼床による整地の度に掘削されたと想定される。なお、壁溝の外周には、幅30cmほどの平坦面がある。

住居内の埋土は、貼床に伴う整地土とその間の生活時に堆積した自然堆積土の交互層であるが、後者の自然堆積層は厚さ数mm程度で分層し図化することはできなかった。また最上層は焼土、炭からなり、火災

にあったことが判明している。なお、住居内から多数の柱穴を検出したが、明確に主柱穴と判断できるものはなかったため、2本柱の可能性がある。

住居1から出土した遺物を、第11図に掲載した。1は、弥生土器広口壺である。口径は18.8cmに復元され、残存高は4.5cmをはかる。口縁部は垂下し、側面を形成する。その側面には、3条の櫛書き沈線を、またその上下に列点文を加飾する。頸部外面には縦方向のハケを、内面にはハケの後にヘラミガキを

施す。2は、弥生土器直口壺である。口径は9.0cmに復元され、残存高は5.0cmをはかる。口縁部には、凹線状の櫛書き沈線3条を加飾する。器面は風化しており、調整は明瞭ではないが、ミガキの可能性はある。3は、弥生土器鉢である。底部径は4.0cmに復元され、残存高は1.7cmをはかる。全体的に器面は風化しており、調整は明瞭ではないが、底部外面にはヘラミガキを施したと考えられる。上面の遺構から混入した可能性がある。

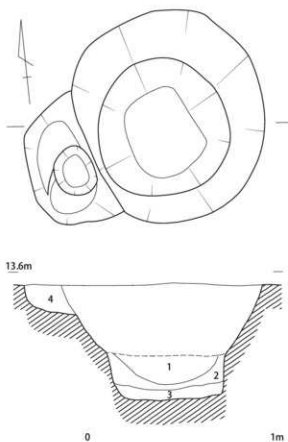
これらのうち1・2から、住居1はIV様式後半前後の所産といえる。

土坑1 調査区北部で検出した、浅い落ち込み状の土坑である。南北2.2m、東西1.7m前後、深さ0.25mを測る。断面図にはビットが認められるが、木の根の可能性が高い。埋土は褐灰色極細粒砂で、際だった特徴は認められない。

土坑1からは、第12図の遺物が出土した。

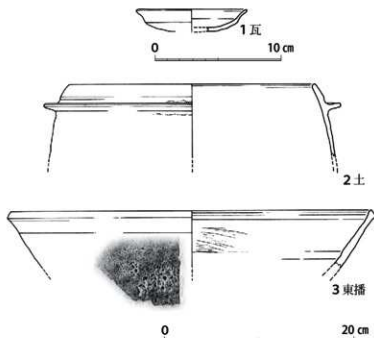
1は、土師器皿である。口径は16.4cmに復元され、残存高は1.7cmをはかる。器面は風化し、調整は不明である。口縁端部の内側には、段状の沈線が巡る。2は、土師器碗である。口径は13.0cmに復元され、残存高は2.6cmをはかる。外面は風化し、調整は不明である。内面のうち口縁部には横ナデを、体部にはヘラミガキを施す。3は、土師器杯である。口径は8.2cm、受部径は9.4cmに復元され、残存高は2.1cmをはかる。器面は摩耗し、調整は不明である。須恵器に近い形状をしており、回転台成形によるものと考えられる。4は、須恵器杯Bである。高台径は8.8cmに復元され、残存高は2.0cmをはかる。高台は底部外周に貼り付けられる。外面は回転ナデ、内面には横ナデを施す。5は、須恵器蓋である。壺などの器種に作る。口径は9.4cmをはかり、残存高は1.7cmをはかる。天井部中央に、つまみの貼り付け痕がある。外面から口縁部内面にかけて回転ナデを、内面には不定方向のナデを施す。6は、土師器小型壺である。高台径は5.2cm、残存高は1.6cmをはかる。器面は風化し調整は不明であるが、回転台成形によるものと考えられる。

出土遺物は、概ね9世紀以降の所

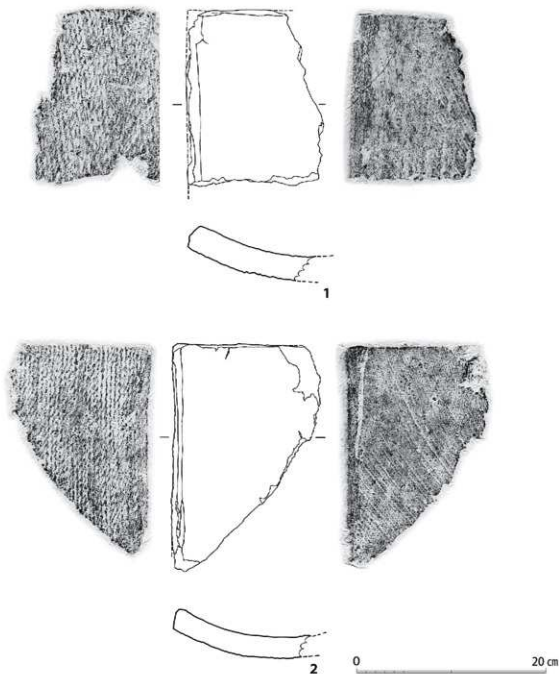


1. 灰黄褐色 (10YR5/2) 極細粒砂 基盤層を母材とする偽礫を含む。炭を含む。
2. 明黄褐色 (10YR6/6) 極細～細粒砂 基盤層を母材とする偽礫を多く含む。
3. 褐灰色 (10YR4/1) シルト～極細粒砂 基盤層を母材とする偽礫を少量含む。
4. 灰黄褐色 (10YR4/2) 極細粒砂 (建物1柱穴埋土)

第16図 土坑3平面・断面図 (1/20)



第17図 土坑3出土遺物1 (1:1/3 2:3:1/4)



第18図 土坑3出土遺物2 (1/4)

産と言えるが、出土した遺物は少ない上に特殊なものが含まれており、時期の詳細は特定しにくい。

土坑2 調査区中央部付近で検出した、浅い落ち込み状の土坑である。南北 1.9 m以上、東西 1.8 m以上、深さ 0.1 mをはかる。埋土は褐灰色極細粒砂で、際だった特徴は認められない。

土坑2からは、第15図の遺物が出土した。

1・2は須恵器杯蓋である。1の口径は18.4cm、残存高は1.3cmをはかる。口縁部から天井部の内面にかけて回転ナデを、外面には回転ヘラケズリを施す。2の口径は15.0cmに復元され、残存高は0.8cmをはかる。内外面はともに、回転ナデを施す。3は、土師器杯である。口径は23.0cmに復元されたが、疑問がある。残存高は2.6cmをはかる。器面は摩耗しており、調整は不明である。口縁端部はやや外反する。4は、黒色土器A類杯である。口径は22.4cmに復元され、器高は4.9cmをはかる。口縁部から体部にかけてヘラミガキを、底部の外面にはヘラケズリを施す。体部の内面から見込みにかけて、連結輪状暗文を

施す。9世紀後半の所産である。5は、須恵器小型壺の口縁部である。口径は6.0cmに復元され、残存高は1.1cmをはかる。口縁部は外反し、内外面ともに回転ナデが施される。

土坑2は、第15図4から9世紀後半頃の所産と言える。

土坑3 調査区南部で検出した、平面円形状の土坑である。長軸長1.1m、短軸長1.0m、深さ0.6mをはかる。漏斗状の断面形を呈する。検出した当初は攪乱と考えたため掘削したが、下層から中世の遺物が出土したため、遺構として扱うことになった。最下層に止水性堆積と考えられる灰色シルトが堆積するものの、湧水がないことから、井戸ではない。土坑3からは、第17・18図の遺物が出土した。

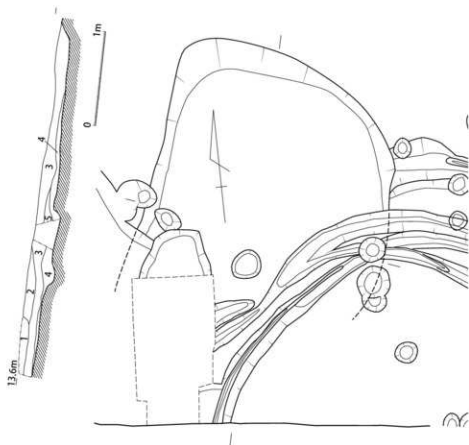
第17図1は、和泉型瓦器皿である。口径は8.6cmに復元され、器高は1.7cmをはかる。口縁部は横ナデによって外反し、底部の外面は押圧痕が残る。内面の調整は不明であるが、ミガキを施した可能性がある。

2は、土師器羽釜である。口径は25.8cm、罎径は31.6cmに復元され、残存高は7.7cmをはかる。罎から口縁部の外面にかけて、横ナデを施す。それ以外については、器面が風化しており、調整は不明である。

3は、東播系須恵器コネ鉢である。口径は38.8cmに復元され、残存高は6.0cmをはかる。内面には不定方向の板ナデを、外面には横ナデを施す。体部外面の中心に、草花文の可能性のある線刻が施されている。

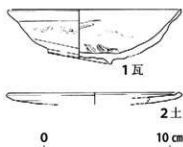
第18図1・2は、平瓦の破片である。上面（内面）には木挽き痕が、下面（外面）には縄目タタキの痕跡が残る。粗粒砂を多く含む。須恵質の焼成である。瓦の大型片は、他に2点出土しているが、それらの特徴も1・2と共通しており、接合はできなかったものの、同一個体の可能性がある。

これらのうち、瓦器皿は12世紀、東播系須恵器は12世紀前半の所産といえる。



- | | |
|---|--|
| 1. 褐灰色 (7.5YR4.5/1) シルト～極細粒砂 | 4. 褐灰色 (7.5YR5/1) 極細粒砂 |
| 2. にぶい褐色 (7.5YR5/3) シルト～極細粒砂 1と2の土質に大きな違いはない。 | 5. 褐灰色 (7.5YR5/1) 極細粒砂 基盤層を母材とする偽礫を含む。 |
| 3. 褐灰色 (7.5YR6/1) 極細粒砂 基盤層及び遺物包含層を母材とする偽礫を含む。 | |

第19図 土坑4平面・断面図 (1/40)



第20図 土坑4出土遺物1
(1/3)

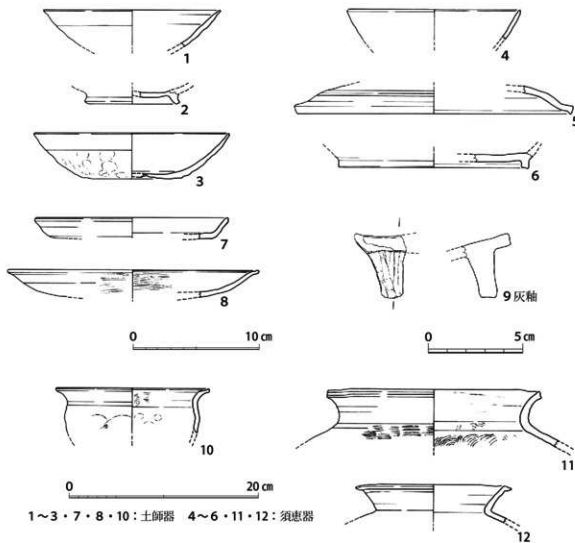
土坑4 調査区南西部で検出した、平面隅丸長方形を呈する土坑である。西側と南半部は住居1や他の土坑や溝と重複し、一部は既設建物の埋設物による損壊もあり、南側の形状等は不明である。検出部分では、長軸長3.1m以上、短軸長2.5m、深さ0.15mをはかる。基底面は住居1埋土となるため、一部を掘りすぎた。土坑4からは、第20・21図にあげる時期の異なる遺物が出土した。

第20図1は、和泉型瓦器碗である。口径は13.5cm前後に復元され、器高は4.3cm、高台径は5.0cmをはかる。見込みには連結平行線状の暗文を、体部内面と外面には粗雑で疎らなヘラミガキが施される。口縁部と高台の周囲には、横ナデを施す。高台は、粘土紐を貼り付けた

だけで、断面三角形状を呈する。Ⅲ-3期の所産である。

2は、土師器小皿である。口径は13.8cmに復元されたが、実際には10cm未満になる可能性が高い。残存高は0.8cmをはかる。器面は内外面ともに摩耗しており、調整は不明である。口縁端部は上方に拡張しており、ての字状口縁が退化したものである。

第21図1・2は、土師器碗である。1の口径は14.0cmに復元され、残存高は2.8cmをはかる。内面から口縁部の外面にかけて横ナデを施し、体部の外面には押圧痕が残る。2の高台径は7.0cmに復元され、



第21図 土坑4出土遺物2 (1~8: 1/3 9: 1/2 10~12: 1/4)

残存高は1.0cmをはかる。器面は風化しており、調整等は不明である。3は、土師器杯である。口径は15.4cmに復元され、器高は3.5cmをはかる。口縁部の外面から内面に、横ナデを施す。体部外面には、押圧痕が残る。

4は、須恵器碗または杯の口縁部である。口径は13.5cmに復元され、残存高は2.4cmをはかる。内外面に、回転ナデを施す。5は、須恵器杯蓋である。口径は21.6cmに復元され、残存高は2.2cmをはかる。天井部の外面には回転ヘラケズリを、内面には一定方向のナデを施す。口縁部の外面から内面には、回転ナデを施す。6は、須恵器杯Bである。高台径は14.8cmに復元され、残存高は1.2cmをはかる。底部外面にはヘラケズリを、内面には回転ナデを施す。高台は、断面四角形を呈する。

7・8は、土師器皿である。7の口径は15.2cmに復元され、器高は1.6cmをはかる。口縁部には、横ナデを施す。底部は摩耗しており、内外面の調整は不明である。8の口径は19.0cmに復元され、残存高は2.0cm以上をはかる。口縁部は水平方向に伸長し、端部はやや上方につまみ上げられる。内外面には、ヘラミガキを施す。

9は灰釉陶器風字硯の脚部で、小口部および側面の一部が残存する。脚部の高さは2.5cm、最大径は2.0cmをはかる。脚部はヘラケズリによって成形される。猿投窯の製品である。

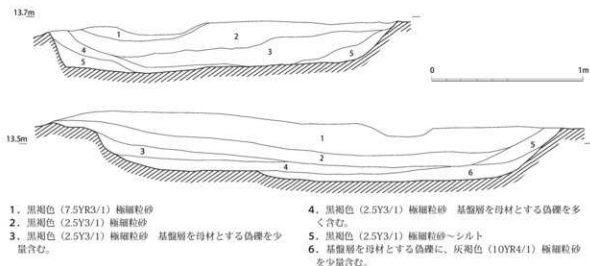
10は土師器甕で、口径は16.2cmに復元され、残存高は4.6cmをはかる。口縁部は外反し、端部は上方に拡張される。口縁部の外面にはナデを、内面にはハケを施す。体部外面には板状工具によるタタキ痕が、内面には押圧痕が残る。

11・12は、須恵器甕である。11の口径は22.4cmに復元され、残存高は6.0cmをはかる。口縁部は外反し、端部の側面は強いナデにより、沈線状に凹んでいる。体部外面にはタタキ痕が、内面には当て具痕が残る。12の口径は16.4cmに復元され、残存高は4.0cmをはかる。口縁部は直線的に伸び、端部は水平方向に拡張されている。口縁部には回転ナデを施す。体部の調整は明確ではない。

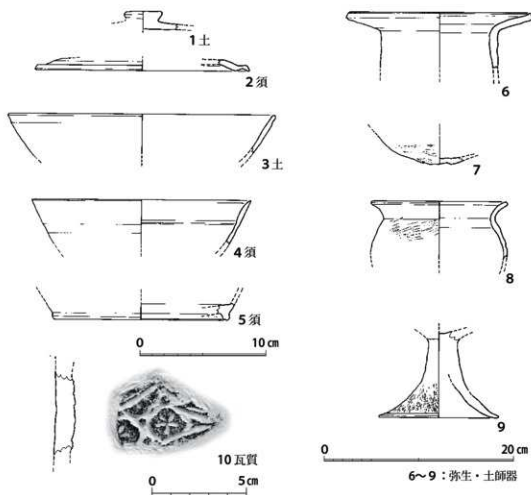
これら第21図の遺物のうち2は高台径が小さく10世紀後半頃、3は豊島北遺跡第5次調査区包含層出土遺物¹より新しい器形となることから10世紀後半と言え。それ以外の遺物には、9世紀～10世紀前半頃と考えられるものもあり、やや時期に幅がある。

なお、出土した遺物から、土坑4は10世紀後半と13世紀の2時期に分かれる。このことは、第21図の遺物を混入品とするよりは、2基以上の土坑が重複していることに起因すると考えておきたい。

溝 1 調査区北部から中央部にかけて検出した。調査区の北部では幅2.5m、深さ0.25m、中央部では3.1m、深さ0.45mをはかる。南にむかつて溝幅は広がり、徐々に深くなっている。埋土は黒褐色極細粒砂を中心とする。大きく3層に区分したが、基本的に大きく変わるところがなく、土砂等の流入に



第22図 溝1断面図 (1/25)



第23図 溝1上層出土遺物 (1~5: 1/3 6~9: 1/4 10: 1/2)

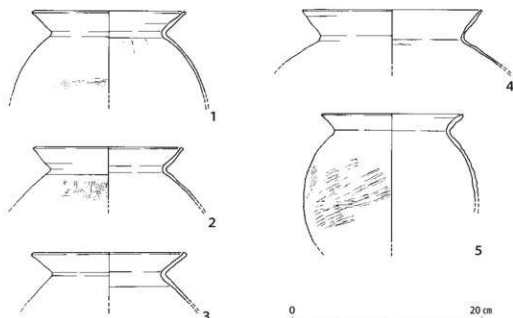
より自然に埋没したと考えられる。岸側には基盤層の2次堆積(第22図土層5)が確認されているが、これらは雨水の流入に伴う堆積と考えられる。

上層から下層にいたるまで、多量の遺物が出土した。そのうち、上層には古墳時代以降の須恵器や古代の遺物が含まれる一方、中～下層の出土遺物には弥生時代終末期から古墳時代前期の遺物が混在する。また、中層と下層の層境付近からは土器の大型片がまとまって出土した。なお、上層から出土したものを第23図に、中～下層から出土したものを第24～26図に掲載した。

上層出土遺物

第23図1は、土師器杯Bのつまみである。つまみの口径は3.0cm、残存高は1.4cmをはかる。器面は摩耗しており、調整等は不明である。2は、須恵器蓋である。口径は17.0cmに復元され、残存高は0.9cmをはかる。口縁部には、回転ナデを施す。3は、土師器杯である。口径は21.0cmに復元され、残存高は3.1cmをはかる。外面には横ナデを施す。内面の調整は、器面が風化しているため不明である。4は、須恵器杯である。口径は17.2cmに復元され、残存高は3.5cmをはかる。内外面に、回転ナデを施す。内面のうち、口縁部と体部の境界に、強いナデによる凹線が巡る。東播磨産の可能性もある。5は、須恵器杯Bである。高台径13.6cmに復元され、残存高1.3cmをはかる。外面は風化しており、調整は不明である。見込みには、ナデが施される。

6は、広口壺である。口径19.8cm、残存高cmを5.7cmをはかる。頸部の外面にはナデを、内面には縦方向のハケが施される。7は、土師器小型器種の底部である。底部径は2.4cmをはかり、残存高は3.0cmをはかる。外面にはヘラミガキを施す。また、焼成後に赤色顔料で塗彩する。内面は器面が風化しているた



第24図 溝1中～下層出土遺物1（1/4）

め、不明である。8は、弥生土器甕である。口径は14.0cmに復元され、残存高は6.1cmをはかる。口縁部には横ナデを施し、体部の外面にはタタキ痕が残る。体部の内面は風化しているものの、板ナデを施した可能性がある。9は、弥生土器高杯の脚部である。裾部径は12.4cm、残存高は9.0cmをはかる。脚柱部から裾部にかけてはハケの後にヘラミガキを施し、端部は横ナデを施した可能性がある。内面の調整は不明である。

10は、瓦質土器の体部片である。体部径等の計測はできない程度の細片であるが、火鉢等の可能性がある。外面に、五弁花等の意匠を施したスタンプが押印されている。胎土は褐色を呈し、金雲母を含むなど、周辺の集落遺跡から出土する中世後期のものとは明らかに異なる。同一個体と考えられる底部片が出土しており、火消し壺の可能性があることから、10は近世の所産と考えられる。ただし、周辺で近世の遺構は確認されていないため、遺物の時期等については不確定要素が残る。

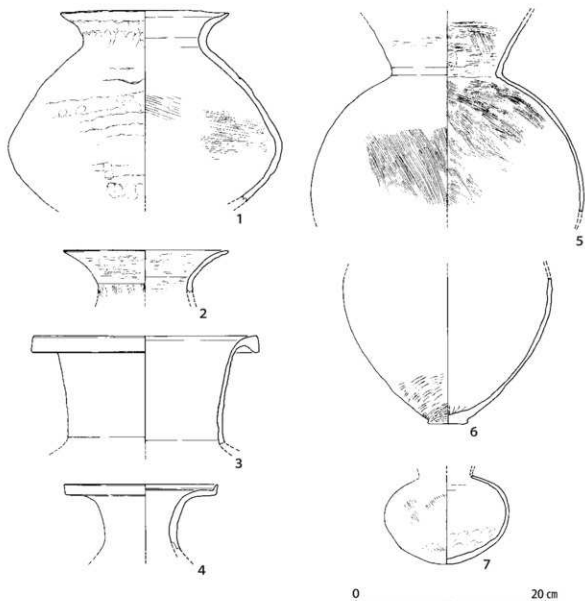
上層からは、弥生時代から古墳時代前期の遺物が多く出土しているが、8～10世紀の遺物も含まれている。これら以外にも、須恵器の甕体部等の大型片も出土していることから、奈良時代までは溝は完全に埋まりきっていなかったと考えられる。その一方で、10世紀前後の遺物については、溝上面から掘削された遺構に伴う可能性がある。

中～下層出土遺物

第24図1～4は、布留式甕である。1の口径は15.8cmに復元され、残存高は8.4cmをはかる。器面は摩耗しており、調整は不明である。2の口径は15.4cmに復元され、残存高は5.5cmをはかる。口縁部には横ナデを、体部の外面には縦方向のハケを施す。体部内面は摩耗しており、調整は不明である。3の口径は16.0cmに復元され、残存高は5.0cmをはかる。器面は風化しており、調整は不明である。口縁端部はつまみ上げられ、断面は三角形状を呈する。4の口径は19.0cmに復元され、残存高は5.5cmをはかる。器面は摩耗し、調整は不明である。

5は、弥生土器甕である。口径は14.8cmに復元され、残存高は13.4cmをはかる。器面は風化しており、体部外面にタタキ痕を残す以外の調整は不明である。

第25図1～4は、広口壺である。1の口径は18.8cm、体部径は29.0cm、残存高は20.3cmをはかる。口縁部に横ナデを、体部の内面にはハケを施す以外の調整は不明である。2の口径は17.6cmに復元され、残存高は4.4cmをはかる。口縁部の内面は横方向の板ナデ、外面は横ナデ、頸部外面には縦方向のハケを

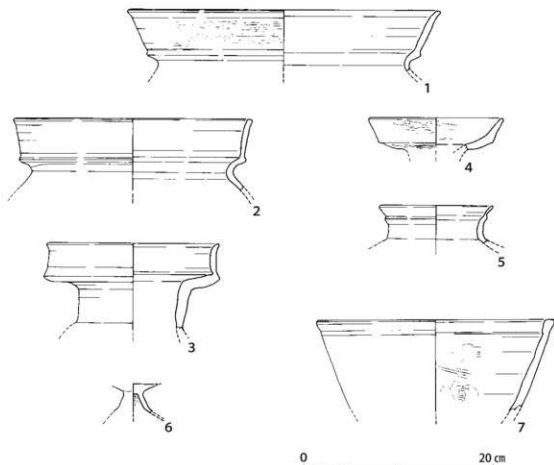


第25図 溝1中～下層出土遺物2 (1/4)

施す。3の口径は23.6cmに復元され、残存高は11.1cmをはかる。口縁部は断面三角形形状を呈し、側面を形成するが加飾等はない。器面は風化しており、調整は不明である。胎土は褐色を呈し、角閃石を含むことから、搬入品と考えられる。4の口径は16.1cmに復元され、残存高は7.0cmをはかる。器面は摩耗しており、調整は不明である。口縁端部は上方に伸長しており、二重口縁の要素を受け入れた意匠のようにも見える。

5は、直口壺もしくは広口壺である。頸部径は11.6cm、残存高は20.2cmをはかる。頸部の外面には横ナデを、頸部の内面及び体部の内外面にはハケを施す。6は、壺の体部である。体部径は17.0cmを、底部径は4.5cm、残存高は15.5cmをはかる。体部上半部から上部の形態が不明であるため、時期等は不明である。底部の外面にタタキ痕が残る以外、調整は不明である。7は、小型丸底壺である。体部径は13.1cm、残存高は4.4cmをはかる。体部の外面には不定方向のハケを施す。内面の調整は不明である。

第26図1～4は、二重口縁壺である。1の口径は32.0cmに復元され、残存高は6.5cmをはかる。内外面はともに、ナデを施す。頸部との境界に、突帯状に粘土紐を貼り付ける。2の口径は24.6cmに復元され、残存高は7.6cmをはかる。口頸部の内外面には、ナデを施す。3の口径は18.5cmを、残存高は9.2cmをは

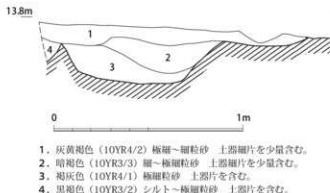


第26図 溝1中～下層出土遺物3 (1/4)

かる。口縁部は、やや外反気味に直立する。内外面には、横ナデを施す。4の口径は14.0cmに復元され、残存高は3.4cmをはかる。内外面はともに、ヘラミガキを施す。

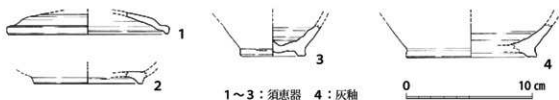
5は、土師器短頸壺である。口径は12.0cmに復元され、残存高は4.1cmをはかる。器面は風化しており、調整は不明である。口縁部は、頸部からつまみ出すように外反する。搬入品の可能性がある。6は、小型高杯の脚部である。残存高3.1cmをはかる。脚部の直径は4.0cmである。杯部との接合には接合法を用いるが、脚部の頂点を平坦に拡張して杯部底面に接合する点で、変則的な方法と言える。器面は風化しており、調整は不明である。7は、土師器鉢である。口径は24.8cmに復元され、残存高は9.7cmをはかる。外面には横ナデを、内面には横方向のハケを施す。口縁端部は内側に折り返され、肥厚する。

溝1の中～下層は、弥生時代終末期から古墳時代前期の遺物を中心であるが、特に層位別にまとまっているような状況はなかった。また、出土遺物中に庄内式土器（特に甕）は揭示していないが、実際には相当量が出土している。しかし、庄内式土器固有の器壁が非常に薄いという特徴により、遺物の風化が著しく、良好な状態で出土しても接合が困難なため、図化できなかったことによる。なお、溝1の中下層からは、布留式後半以降の遺物はみられなかった。このことから、溝1は遅くとも古墳時代前期頃までに掘削されたと言える。一方、上層のうち新しい遺物



1. 灰黄褐色（10YR4/2）極細～細粒砂 土器碎片を少量含む。
2. 暗褐色（10YR3/3）細～極細粒砂 土器碎片を少量含む。
3. 褐灰色（10YR4/1）極細粒砂 土器片を含む。
4. 黒褐色（10YR3/2）シルト～極細粒砂 土器片を含む。

第27図 溝2断面図 (1/20)



第28図 溝2出土遺物 (1/3)

は、古墳時代後期から平安時代前期までと幅広い。さらに、溝埋没後に掘削された遺構に伴うものも含まれるため、溝が完全に埋没した時期は特定しにくい。しかし、上層の遺物は8世紀と9世紀後半以降にわかれ、また須恵器製の体部片など、古墳時代後期以降の遺物はある程度出土していることをふまえると、8世紀頃に埋没した可能性がある。

なお、弥生時代の遺物は中期から終末期のものが、層位を問わずに出土することから、耕作等により周囲の遺構から掻き上げられたものが再投棄されたと考えられる。

溝 2 調査区北西端で検出した溝で、2条以上が重複する。上段の溝(第27図土層1)は、検出部分で1.4 m以上、深さ10 cm前後をはかる。残存部分から、幅1.8 m前後になると推測できる。下段(土層2・3)の溝は、幅0.7 m、深さ0.3 m前後をはかる。北から南に向かって、緩やかな勾配で深くなる。また、溝の西側にも土層4とする落ち込みが確認されており、これも溝となる可能性が高い。

溝埋土の特徴は褐色系の極細粒砂で、上段と下段で大きく異なることなく、遺物も細片を中心とする。埋土の状況から、排水路と考えられる。

溝2から出土した遺物は、第28図に掲載した。1は、須恵器杯蓋である。口径は12.6 cmに復元され、残存高は1.7 cmをはかる。口縁部の内外面には回転ナデを、天井部の外面には回転ヘラケズリを施す。2は、須恵器杯Bである。高台径は8.6 cmに復元され、残存高は1.0 cmをはかる。混入品の可能性がある。



1和泉

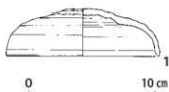


2和泉



3楠葉

第29図 溝3東部出土遺物 (1/3)



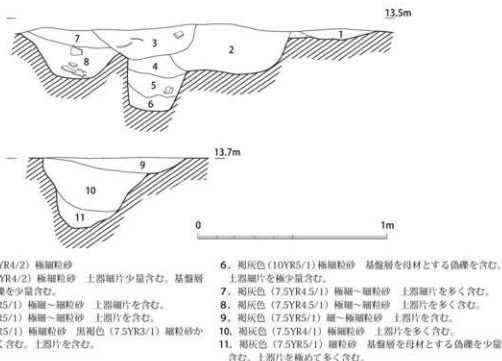
第30図 溝3西部出土遺物 (1/3)

3は、須恵器小型壺である。高台径は5.0 cmに復元され、残存高は2.6 cmをはかる。内面及び外面のうち高台の周囲には回転ナデを施すが、高台の内側には調整を施さない。切り離し痕は確認できない。4は、灰釉陶器小型壺である。高台径は10.2 cmに復元され、残存高は2.7 cmをはかる。内外面に回転ナデを施す。高台の周辺は露胎するが、高台の内側まで施釉されている。猿投窯の製品である。

これらの遺物から、溝2は10世紀後半の所産となる。しかし、溝の方向は明らかに建物2の主軸方向と並行している。よって、溝2の掘削時期は、10世紀以前に遡る可能性がある。

溝 3 調査区中央から南部にかけて検出した溝で、調査区を東西に横断する。東端では幅0.8 m、深さ0.25 mをはかり、少なくとも2条の溝(溝3-1・2)が重複する。一方、南西端では幅1.6 m、深さ0.45 mをはかり、溝3-1・2の他にも5条以上の溝が重複する状況にある。さらに、西部では溝3-3も合流するなど、錯綜する状況にある。

このうち溝3-1・2からは遺物が多量に出土している。溝3の東部で出土した遺物のうち、中世のものを第29図に、西部で出土した古墳時代後期のものを第30図に、それ以外の溝3-1・2から出土したものを第32図に、また溝3-3とした別の溝から出土したものを第33図に掲載した。



第31図 溝3断面図 (1/20)

溝3東部出土遺物 (中世)

第29図1・2は、和泉型瓦器碗である。1の口径は15.4cmに復元され、残存高は2.3cmをはかる。口縁部には横ナデを、体部の内面にはミガキを施すが、外面には押圧痕が残る。Ⅲ-2期の所産である。2の口径は14.4cmに復元され、残存高は2.7cmをはかる。調整は37と同じである。Ⅲ-2期の所産である。3は、楠葉型瓦器碗である。口径は14.4cmに復元され、残存高は2.3cmをはかる。口縁端部は強いナデでやや外反するものの、沈線は施されない。口縁部の外面には横ナデを、体部には粗雑なヘラミガキを施すが押圧痕が残る。内面にはヘラミガキを施すが、隙間が目立つ。Ⅲ-2期の所産であろう。

これらの遺物は、溝3のうち、攪乱の東側から多量の弥生土器の破片とともに出土した。溝上面の精査では確認できなかったが、西部と時期的にかけ離れていることから、溝3の埋没後に掘削された遺構に帰属すると思われる。

溝3西部出土遺物 (古墳時代後期)

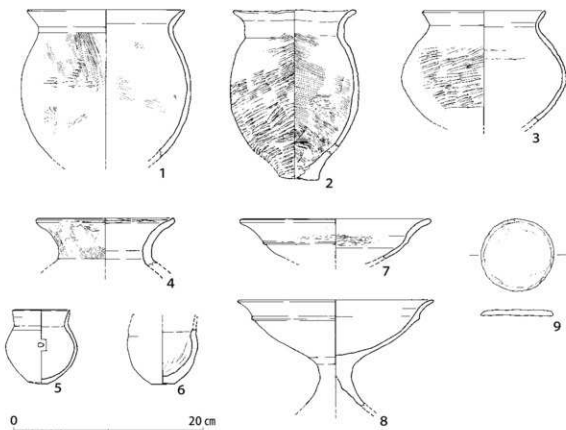
第30図1は、須恵器杯蓋である。口径は15.8cmに復元され、器高は3.7cmをはかる。口縁部は歪んでおり、実際は復元値よりも小型になると考えられる。口縁部には横ナデを、天井部の外面には回転ヘラケズリを、内面の中央付近には当て具痕を一定方向のナデですり消した痕跡がある。TK209形式にあたる。

溝3-1・2出土遺物 (弥生時代)

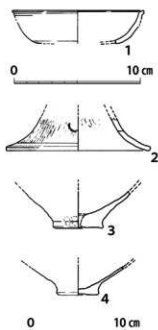
第32図1～3は弥生土器甕である。1の口径は16.6cmに復元され、残存高は15.7cmをはかる。口縁部には横ナデを、体部の外面にはタタキの後に縦方向のハケを施す。体部の内面には横ハケを施す。2の口径は13.0cmに復元され、器高は17.9cmをはかる。口縁部には横ナデを、体部の外面にはタタキを、内面にはハケを施す。3の口径は13.0cmに復元され、残存高は11.7cmをはかる。外面のうち、口縁部から体部上半の調整は不明である。ただし、体部の上半についてはタタキ痕が確認できないことから、タタキの後にハケ等を施した可能性がある。内面の調整は不明であるが、継ぎ目痕が確認できる。

4は、短頸広口壺である。口径は14.0cmに復元され、残存高は5.1cmをはかる。口縁部には横ナデを、頸部の外面にはハケを施す。頸部内面の調整は、不明である。口縁端部はほぼ垂直につまみ上げられる。

5・6は、小型鉢である。5の口径は5.8cmに復元され、底部径は2.2cm前後をはかる。器高は7.8cmをはかる。器面は摩耗しており、調整は不明である。体部の中位付近に、穿孔がある。6の頸部径7.2cmを、



第32図 溝3-1・2出土遺物(1/4)

第33図 溝3-3出土遺物
(1:1/3 2~4:1/4)

底部径は2.2cm前後をはかる。残存高は5.9cmをはかる。体部の内外面に、押圧が残る。

7・8は、高杯である。7の口径は19.4cmに復元され、残存高は4.2cmをはかる。内外面にはヘラミガキを施したようにみえるが、判然としない。8の口径は20.2cmに復元され、杯部の器高は6.0cm、残存高は11.3cmをはかる。器面は摩耗しており、調整は不明である。

9は、円盤状の土製品である。直径7.6cm、厚さ7mm前後をはかる。紐を通すための穿孔はないものの、蓋の可能性がある。弥生時代の所産と考えられる。

溝3-3出土遺物

第33図1は、土師器杯Aである。口径は10.2cmに復元され、器高は2.6cmをはかる。器面は風化しており、調整は明確ではない。口縁端部の内側に沈線を施す。都城系土師器である。この遺物は、他に出土した遺物と時期が明らかに異なることから、溝5などからの混入品となる可能性が高い。

2は、弥生土器高杯の脚部であろう。裾部径は15.0cmに復元され、残存高は3.6cmをはかる。脚部の中位に穿孔がある。外面には縦方向のヘラミガキを、内面には横ナデを施す。3は、弥生土器鉢である。底部径は5.2cm、残存高は3.9cmをはかる。内外面はともに風化しており、調整は明確ではないが、内面にハケの工具痕が残る。4は、弥生土器壺または鉢の底部である。底部径は4.0cmに復元され、残存高は3.0cmをはかる。器面は剝離しており、調整は不明である。

溝3は、竪穴住居1の周囲に巡らされた区画溝のようにもみえるが時期が全く異なり、平面の形状が

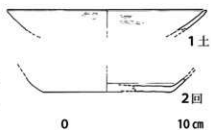
ら当遺跡で多くみられる弥生時代終末期の雨水排水用の溝と言える。ただし、溝の東側では、瓦器碗など中世の遺物が出土しており、一部に中世の遺構が重複している可能性がある。

溝 4 調査区南西部で検出した溝で、西端は溝3-3と重複する。溝の東側は削平されているが、建物1の方向から西に掘削されている。幅0.2～0.3 m、深さ0.05 mをはかる。

溝4から出土した遺物を、第34図にあげた。

1は、土師器皿である。口径は15.6cmに復元され、残存高は1.9 cmをはかる。内外面には、ヘラミガキが施される。2は、回転台土師器杯である。底部径は10.0cmに復元され、残存高は1.0cmをはかる。体部には回転ナデを、底部の外面には回転ヘラケズリの後にナデを施す。

1は10世紀頃の所産、2の回転台土師器も同時期の搬入品と考えられる。なお、回転台土師器はこれ以外の遺構からも、若干出土している。ただし、これらの回転台土師器は、当調査区西方に位置する第5次調査区の井戸1で出土したものに比べて底部の切り離しが丁寧で、切り離し後に押圧を施すこともなく、生産地は全く異なる。



第34図 溝4出土遺物(1/3)

3. まとめ

今回の調査では、当初の想定どおり、弥生時代から中世にいたる各時期の遺構が確認され、周辺の調査区と同じく多彩な成果が得られた。これら成果のうち、主だったものをまとめると、以下ようになる。

(1) 弥生時代中期後半の住居1が、良好な状態で検出されたこと。この住居は貼床を5回行い、その都度床面を拡張していたことが、断面観察で確認できた。また、最上層に炭・粘土が堆積していることから、住居の廃絶が火災による可能性が非常に高い。住居1のように、住居内の拡張から廃絶にいたる変遷がたどれる事例は少なく、この時期の住居の利用状況を検討する上でも重要な資料となるだろう。

(2) 溝1から、古墳時代の遺物がまをもって出土したこと。これまでも各調査区で古墳時代前期の遺構が確認されていたが、今回の調査区で弥生時代終末期から古墳時代前期の遺物が多数出土したことにより、曾根遺跡の集落が古墳時代前期にかけて堅調に推移することがほぼ裏付けられた。ところで、豊中市内の弥生集落は、上津島遺跡など猪名川流域に展開する一部の遺跡をのぞき弥生時代終末期に盛期を迎え、古墳時代にその規模を縮小する傾向がある。特に豊中台地では、市北部最大の集落である新免遺跡が衰退し、その周囲に展開した集落の動向は追跡できなくなるなど、古墳時代前期に集落の様相は激変する。その中であって、曾根遺跡だけが継続することは例外的な事例とも言える。ただし、近世の桜塚街道に先行する交通路が、この時期に遡って機能していたと考えた場合、曾根遺跡の堅調な推移は、上津島遺跡や利倉南遺跡など、この時期に流通拠点として展開する諸遺跡との関連から説明できることになるかもしれない。

(3) 土坑4から猿投産灰軸風字硯が、溝2から猿投産灰軸小壺型が出土したこと。全国的に、古代の硯は官衙もしくはその関連施設、寺院以外では出土しない傾向がある。一方、豊中市内では、これまで桜井谷窯跡群(緑丘窯跡)・本町遺跡第29次調査区・上津島南遺跡第1次調査区・北条遺跡第6次調査区で出土している。このうち、緑丘窯跡のものは灰原から出土したもので²、本町遺跡第29次調査区では古墳時代～古代の居館が確認されており、出土した円面硯はそれに関連する可能性がある³。また、上津島南遺跡第1次調査区は官衙関連遺物なども多数出土し、一帯の遺跡は難波津推定地⁴と考えられている。北条遺跡第6次調査区では円面硯とともに古代瓦も出土しており、付近に寺院の存在が想定されている⁵。このように、古代の硯が特殊な遺跡から出土することは、豊中市内でも共通している。

ところで、当遺跡で「超」大型建物群が出現するのは、10世紀である。風字硯が出土した土坑4はその時期の所産となることから、風字硯はこの建物群の性格を示す遺物と言える。この建物群の規模は古代官衙の政庁を遙かに上回り、全国でも類例がない。その上、古代官衙遺跡がほぼ廃絶する10世紀後半以

降に継続するため、官衙としての性格は付与できない。また、周辺の調査区の事例をあわせて、古代瓦は極少量しか出土していないことから、寺社の可能性も乏しい。一方、11世紀後半には曾根遺跡でも中世の集落が出現することから、この建物群は11世紀前半のうちに廃絶する可能性が非常に高い。つまり、建物群の廃絶には、その直後にはじまる領域型荘園の立荘に伴う地域編成との関連が想定される⁶。

11世紀後半になると、当遺跡の周辺には六車御稲・垂水西牧原田郷・原田荘によって構成される荘園が展開する。そのうち、垂水西牧は垂水東牧とともに、もともと古代近都牧である垂水牧を分割・再編して成立した荘園である。これらのことをふまえると、この建物群が古代牧の経営に関わる施設とする選択肢も留意してもよいのではないかと考えられる。

なお、詳細な時期は特定できないものの建物1やそれに関連する可能性がある溝5など、この建物群の内部にも、同時期の可能性のある建物が存在することが今回の調査で判明した。このことは、建物群の内部構造を知る上でも重要な成果といえるだろう。

(4) 土坑3から、中世の遺物とともに平瓦の大型片が出土したこと。瓦は、古代・中世において寺院の存在を示す遺物として扱われる。よって、今回の調査で瓦が出土したことにより、周辺に中世前期の寺院が存在する可能性が生じた。

以上(1)～(4)に示したように、今回の発掘調査においても、曾根一帯の歴史に関わる重要な成果を得た。また、当調査区のみならずその周囲においても、重要な遺構・遺物が存在することは容易に想定できる。よって、周辺の開発にあたっては、これらの埋蔵文化財について十分に留意する必要がある。

【注】

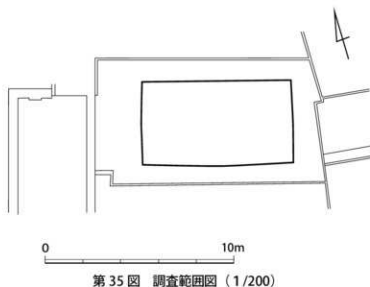
1. 豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 平成21年度(2009年度)』2010年
2. 緑丘団地遺跡調査団『緑丘遺跡』1984年
3. 豊中市教育委員会『文化財ニュース 豊中 No.33』2006年
4. 橋田 正徳『難波津から河尻へ』(九州古文化研究会『古文化談叢 第70集』2013年)
5. 豊中市教育委員会『春日大社南郷日代今西氏屋敷』2005年
6. 橋田 正徳『11世紀後半における集落編成からみた領域型荘園の立荘』(九州古文化研究会『古文化談叢 第64集』2010年)

第Ⅲ章 桜塚古墳群第14次調査

1. 調査の経緯

今回の調査地は中桜塚2丁目118-5に所在する。平成31年(2019年)1月9日に提出された土木工事等による埋蔵文化財包蔵地発掘の届出に基づいて、1月31日に確認調査を実施したところ、地表下20cmで基盤層を検出し、その上面で遺構を確認した。一方、予定建物建築に伴う掘削深度は地表下57cmに達することから、現行の計画の場合、遺構破壊は免れないことが判明した。このことについて事業主と協議を行ったものの、建築計画を変更する余地がないため、緊急の本発掘調査を実施することになった。

調査は、建築範囲にかかる40.0㎡を対象に、平成31年(2019年)2月18日から3月15日にかけて実施した。なお、廃土スペース確保のため、場内反転による調査を行った。



第35図 調査範囲図 (1/200)

2. 調査の成果

(1) 遺跡の概要

桜塚古墳群は豊中台地と呼ばれる中段段丘の平坦地に展開する古墳群で、主要な古墳は4世紀半ばか



第36図 調査地位置図 (1/5,000)

ら5世紀後半にかけて築造される。明治12年(1879年)に描かれた「三十六墳所在総図」には、36基の古墳が描かれており、近年の発掘調査により新たに発見された古墳を加えると40基以上の古墳が存在したことが知られている。

昭和初期に行われた区画整理事業で古墳の多くは消滅し、現在は大石塚古墳・小石塚古墳・大塚古墳・御獅子塚古墳・南天平塚古墳の5基が残る。桜塚古墳群は大石塚古墳・小石塚古墳を中心とした西群、大塚古墳や御獅子塚古墳を中心とした東群に大別される。当調査地は西群と東群の中間地点にあたり、先の絵図ではこの付近に2基の古墳が描かれている。また、当調査地の南側から東側にかけては岡町遺跡が隣接している。岡町遺跡は中世から近世にわたる集落遺跡で、16世紀後半に焼失したと伝えられる善行寺(現在の瑞輪寺)や牛頭天王社(現在の原田神社)との関連が考えられる。

(2) 基本層序

当該調査区における基本層序は、概ね盛土層・耕作土層・基盤層で構成される。

1層は現代の盛土層および攪乱である。2層・3層は暗灰黄色系の細粒砂であり、2層は近現代の耕作土、3層は近世末から近代の耕作土である。3層下層は基盤層となる。

6層(基盤層)は、明黄褐色シルトとなる。6層上面では近世の耕作に伴う極めて浅い鋤溝群がおおよそ南北方向に数多くみられた。鋤溝の埋土は4層の暗灰黄色細粒砂である。

調査は重機で3層までを除去し、6層上面検出後は人力による掘削を行った。なお、現代の攪乱による削平のため、遺構面の残存状況は調査面積の約半分ほどであった。

(3) 検出した遺構と出土遺物

検出した遺構は、ピットおよび溝状遺構である。

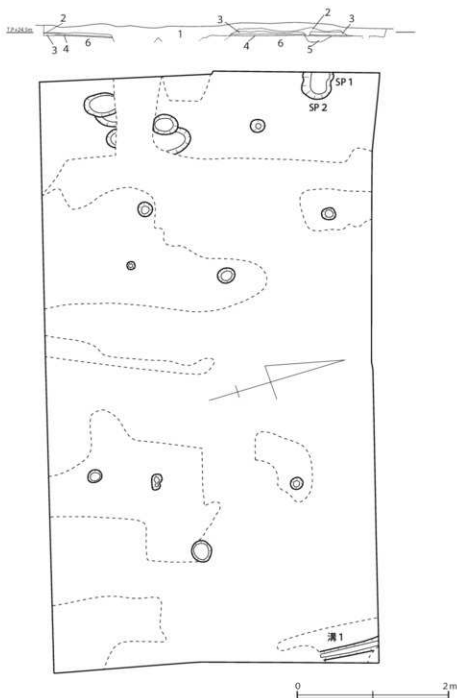
SP 1・SP 2 SP 1・2は、調査区の北西で検出した。第37図に示した西壁土層断面の5層(褐灰色細粒砂)が、埋土にあたる。SP 1・SP 2とも埋土に差はなく、約30%ほどの基盤層を母材とする偽礫が混じる。近世の白磁碗片が1片出土したことから、ピットの時期は近世と思われる。

溝 1 溝1は、調査区北東で検出した南北方向に掘削された溝である。埋土はSP 1・SP 2と同じく褐灰色細粒砂であり、検出面からの深さは約5cmである。調査区全体に見られる浅い鋤溝群はやや北東方向に傾いているが、溝1の方向は南北軸であり、鋤溝群より先行する時期と考えられる。

ピット SP 1・SP 2を含め、調査区全体で17基のピットを検出している。しかし、極めて浅いものが多いため、柱穴ではなく耕作に伴う遺構と考えられる。

3. まとめ

今回の調査では古墳関連の遺構の検出が想定されたが、近世以降の耕作に伴う遺構が確認された。これらの遺構は南と東に隣接する岡町遺跡との関連が指摘される。岡町遺跡第2次調査では溝1と同様に深度5cmほどの南北溝が検出されていることから、同様の機能をもった溝と考えられ、集落縁辺部の耕作地の様相を示している。岡町遺跡の調査は2次に限られ、全体像は十分に解明できていない。よって、周辺における調査の進展をまって、今回の調査結果について改めて検討しなおす必要があるだろう。なお、「三十六墳所在総図」には周辺一帯に2基の古墳が描かれていることから、古墳に関連する遺構にも引き続き十分留意していかなければならない。



1. 掘瓦・整地土
2. 暗灰黄色 (2.5Y4/1～5/1) 細粒砂 (～シルト) 近現代の耕作土。
礫 直径0.1～0.3cm 1%未満・炭化物 直径0.1～0.3cm 1%未満・土溜片 直径0.3cm 1%未満
3. 暗灰黄色 (2.5Y5/1) 細粒砂 (～シルト) 近代耕作土。
礫 直径0.1～0.3cm 1%未満・炭化物 直径0.1cm 1%未満
4. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 細粒砂 (～シルト) 融溜埋土。
礫 直径0.1cm～0.3cm 1%未満・基盤層 5% 直径0.1～0.3cm 粒状に有り。
5. 明灰色 (7.5YR5/1) 細粒砂 (～シルト) 石炭 直径0.1～0.5cm 1% マンガン粒全体的に有り 5%
土器砂片 (10R5/6) 有り。 基盤層ブロック 30%有り。炭化物 1%未満有り。近世白磁片 1片含む。(SP1・2埋土)
6. 明黄褐色 (10YR6/8) シルト (～極細粒砂) 下位は灰白色 (10YR8/1) を呈する。基盤層。

第 37 図 調査区平面・断面図 (1/50)

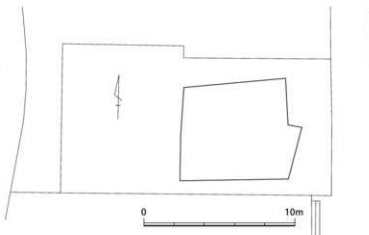
第IV章 北刀根山遺跡第2次調査

1. 調査の経緯

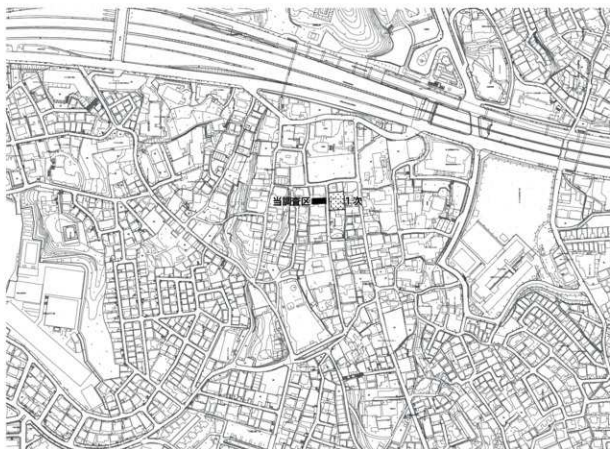
平成31年(2019年)3月6日に豊中市刀根山元町175・175-2・176の各一部において個人住宅新築工事にかかる土木工事に伴う埋蔵文化財発掘の届出が提出されたことをうけて、同年3月25日に確認調査を実施した。この結果、地表下35cmのところで溝等の遺構を検出した。

一方、計画中の建物の基礎は、現地表から60cm下まで掘削する予定であり、現状では遺構面等が破壊されることは避けられないことが判明した。このため、保存のための協議を

行ったが、建物の構造ならびに敷地の形状等に制約されて、計画の変更はできないことが確定した。協議の結果をうけて、建設予定範囲の一部と駐車場について、本発掘調査を実施することとなった。



第38図 調査範囲図(1/250)



第39図 調査地位位置図(1/5,000)

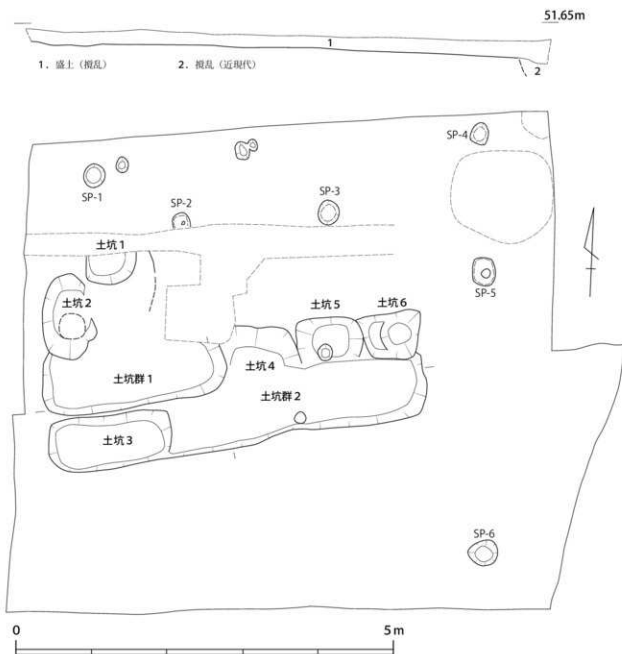
2. 調査の概要

(1) 基本層序

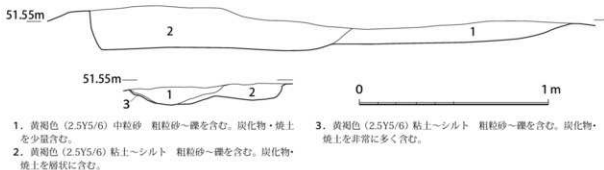
当調査区は、丘陵頂部付近の斜面に位置し、また古くから集落内の住宅地でもあることから、沖積作用によって土砂が堆積する環境ではない。既設建物の基礎等により、現地表下20cmまで攪乱されており、耕作土や遺物包含層等は確認できなかった。遺構は、段丘形成層である砂礫層の上面で検出された。

(2) 検出した遺構と出土遺物

当調査区では、土坑群2基と柱穴等が確認された。また、第40図の平面図には示さなかったが、調査



第40図 調査区平面・断面図 (1/50)



第41図 土坑群2断面図 (1/20)

区の南側には、近世後期を中心とする時期の井戸の可能性のある土坑など多数の遺構が検出された。しかし、これらについてはその後の建築工事等への影響を考慮し、遺構面上面で検出するだけにとどめた。

土坑群1 調査区中央部で、土坑が群集する状態で検出された。このような状況にある複数の土坑をまとめて、ここでは土坑群として扱う。

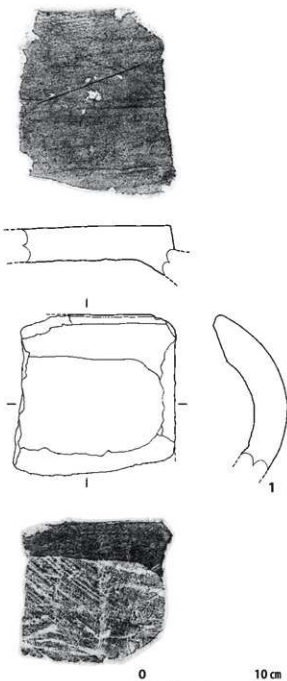
土坑群1は、全体で南北2.4m、東西2.3m以上、深さ0.2～0.3m前後をはかる。この中に南北0.8m、東西0.4m、深さ0.3mの土坑2など少なくとも3基の土坑が群集する。埋土は、炭・焼土を多く含む基盤層に由来するであろう黄褐色粘土である。人為的な埋め戻し、あるいは整地によるものと言える。

土坑群2 土坑群1の南側で検出した。全体では東西4.95m、南北1.6m、深さ0.2m前後をはかる。この中に東西1.6m、南北0.8m、深さ0.3mの土坑3や、東西0.7m、南北0.65m、深さ0.2mの土坑6など少なくとも5基以上の土坑が群集している。埋土等の特徴は、土坑群と同じである。

なお、中世後期の所産と考えられる常滑焼・土師器の細片が極少量出土したものの、実測できるものはなかった。

柱穴 柱穴のうち、SP-1～5は埋土が非常に堅緻であるため、完掘できなかったが、深さ30cm以上となることは確実である。いずれも、直径は30cm前後をはかる。柱痕は、直径5cm～10cm程度をはかる。また、SP-1～5の柱痕埋土は、掘削した範囲ですべて炭であった。このことは、柱が燃えたことを示しており、家屋が何らかの火災にあったこと示す。

出土遺物 当調査区では遺物はほとんど出土しなかった。第42図の丸瓦は、近世以降の土坑上面で採取された遺物である。外面は、縄目タタキの後に工具で平滑に仕上げられている。また、内面には木



第42図 出土遺物 (1/3)

挽き痕がある。これらの調整から、近世でも早い時期の所産になる可能性があるものの、焼し方に光沢があり、時期は特定しにくい。

3. まとめ

今回の発掘調査の契機となった建築工事に先立つ確認調査では、幅5m、深さ30cmに及ぶ大規模な遺構が検出された。この遺構について、当遺跡もしくはその周囲に刀根山城が存在することをふまえ、これが堀跡になる可能性が想定された。しかし、調査の結果、この大型遺構は複数の土坑が群集したものであることが明らかになった。

ところで、土坑群2をみると土坑が東西方向に並び、南北2列に配置された形態となる。このような土坑の配置は、道路をはさんで東に位置する第1次調査区で検出された埋喪遺構と共通しており、土坑群が同様の遺構であることを示唆する。埋喪遺構は、藍など染料の貯蔵施設や能舞台の音響設備として利用されることが知られている。第1次調査区で検出した埋喪遺構は、規模・形状に共通性がなく、配置も不規則であることから、能舞台となる可能性は乏しい。このことから、当調査区の周辺にはなにがしかの商業施設もしくは工業施設があったことになる。また、第1章でもふれた周辺の確認調査等の成果をあわせると、一帯については都市的な景観が十分に想定できる。

一方、土坑群の周囲で検出された柱穴から、火災によって焼失した家屋の存在が明らかになった。また第1次調査区およびその東側で行われた確認調査でも、遺構而上に焼土層の堆積が確認されていることから、常楽寺の周辺で大規模な火災があった可能性がある。その火災の原因については明確にはできないが、真宗寺院あるいは刀根山城という、当遺跡の性格をふまえると戦乱等の要因を想定する余地は十分にある。真宗寺院を中心とする都市的な場から近世刀根山村への転換という集落成員の断絶と、大規模な火災の関連は今後の調査にあたる上で、十分に考慮するべきであろう。

このように、今回の調査では刀根山御坊や刀根山城など重要な史跡が知られていながら、その実態についてほとんど解明されていない戦国時代の刀根山に関して、都市の様相を帯びた状況や大規模な火災など重要な成果を得ることができた。したがって、周辺における開発においても、これら集落関連遺構の存在について留意する必要がある。

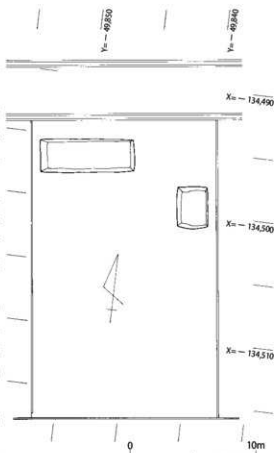
第V章 新免遺跡第73次調査

1. 調査の経緯

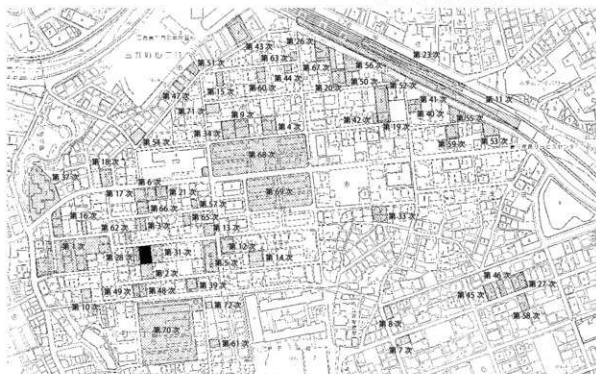
調査地点は豊中市玉井町3丁目60に所在する。平成31年（2019年）3月18日、個人住宅建築にかかる発掘届（文化財保護法第93条）が提出された。計画建物は木造の2階建てで、基礎は現地表より-50cmのベタ基礎、北側の一部に限り約1.2mの深基礎が予定された。

敷地内4ヶ所にトレンチを設けて確認調査を実施したところ、基礎予定範囲の大部分は、以前にあった共同住宅の基礎工事により、すでに約1mの深さまで掘削が行われていた。ただし、今回計画範囲の北東部では、遺物包含層が現地表から-70～90cm、遺構面（洪積層）が-90cmの深さにおいて良好に遺存し、深さ約1mの既掘削部分においても、なお遺構の一部は良好に残されていることが判明した。したがって、少なくとも敷地北側の2ヶ所に予定される深基礎部分についても、通常の本発掘調査が必要であると判断された。

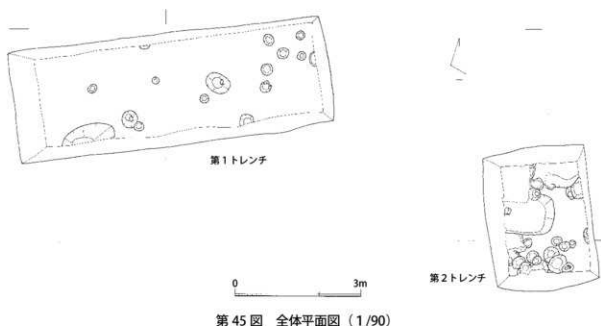
この調査結果にもとづき施工側と協議した結果、令和元年（2019年）5月27日から同年6月14日までの日程を得て、深基礎が予定される敷地内2ヶ所、31.36㎡を対象に本発掘調査を実施する運びとなった。



第43図 調査範囲図（1/300）



第44図 調査地位位置図（1/5,000）



第45図 全体平面図 (1/90)

2. 遺跡の概要

新免遺跡は、阪急豊中駅西方、東西 890 m、南北 540 m の範囲に広がる、弥生時代中期と古墳時代後期を中心とした市域北部を代表する集落遺跡の一つである。昭和 50 年代以降、戦前期の木造住宅の建て替えを契機として、継続的に調査が行われてきた。個々の調査面積は小規模なものが多いが、市域では調査回数が多い遺跡となっている。遺跡中央付近に想定される開析谷をはさんで、弥生時代、古墳時代とも北部と西部に遺構群としての大きなまとまりが見出される。弥生時代では直径 9 m 前後を計る大型竪穴住居、方形周溝墓群、磨製石剣の出土などを特徴とし、古墳時代では竪穴住居と掘立柱建物など住居形式の多様性ととも、須恵器や玉類を伴う祭祀遺構、韓式系土器の出土に示される渡来系集団の居住などが特筆される。

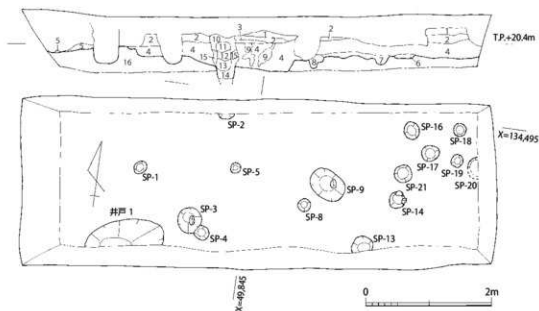
3. 調査の成果

(1) 第1トレンチ

調査は、深基礎が予定される敷地北部の 2 ヶ所にトレンチを設定して行なった。第 1 トレンチは、以前にあった共同住宅の基礎掘削範囲の一部に相当し、全体が埋め戻し土で覆われていたが、トレンチ北壁は既掘部分の北壁にもあたり、もとの層序が良好に残されていた。それによると、現地表より 30 cm に耕作土層があり、その直下に黒褐色シルト～極細粒砂の遺物包含層が約 25 cm の厚さで確認された。遺物包含層の下は、明黄褐色～橙色シルトを主体とした洪積層（地山）であり、上面は遺構面となっている。トレンチ西側は、地山層の検出レベルが浅く、遺物包含層は認められなかった。後世に削平を受けたことを示している。東側に向かって地山が下がり、包含層の厚みを増しているが、遺構の重複により形成されたものである可能性が高い。ただしその状況を断面観察で明らかにすることはできなかった。

遺構は、いずれも埋め戻し土直下の地山層上面において検出したものである。過去の基礎掘削に伴い、遺構上部は 15～40 cm の深さで削平を受けているものと推定されたが、それでも井戸と見られる大型土坑 1 基、ビット 15 個を検出することができた。

井戸 トレンチ南西端で検出した井戸と見られる大型の土坑で、約 3 分の 2 程度を検出した。規模は東西 1.25 m、南北 0.45 m 以上、深さ 0.9 m 以上を計測する。平面の形状は不整形、断面は上部と



1. 10YR7/2 にふい黄褐色極細粒砂～細砂。磁器破片含む。
2. 10YR6/2 灰黄褐色極細粒砂（新作土）。
3. 10YR6/3 にふい黄褐色シルト～極細粒砂。土器破片、炭化物を微量含む。
4. 10YR3/1 黒褐色シルト～極細粒砂（遺構埋土・遺物包含む）。
5. 10YR4/2 灰黄褐色シルト。土器片を微量に含む。
6. 10YR4/1 褐灰色シルト。地山（基盤）ブロックを微量に含む。
7. 10YR5/1 褐灰色シルト。地山ブロックを 30% 含む。
8. 10YR4/1 褐灰色シルト。地山ブロックを 10% 含む。
9. 10YR6/3 にふい黄褐色極細粒砂。
10. 10YR7/3 にふい黄褐色シルト～極細粒砂。
11. 10YR5/2 灰黄褐色シルト～極細粒砂。土器片を微量に含む。
12. 10YR4/2 灰黄褐色シルト～極細粒砂。土器片多く含む。
13. 10YR3/2 黒褐色シルト。
14. 10YR4/1 褐灰色シルト。地山ブロックを少量含む。
15. 10YR6/3 にふい黄褐色極細粒砂。
16. 10YR7/6 明黄褐色～7.5YR6/6 褐色シルト（基盤層）。径 10cm 以下の礫を含む。

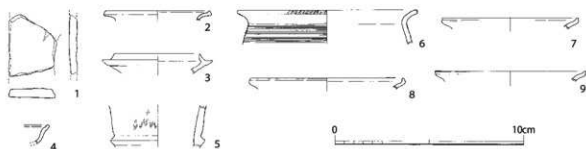
第46図 第1トレンチ平面・断面図（1/60）

下部で傾斜角度を異にし、上部が棚鉢状、下部は円筒状に近い形状を呈する。傾斜変換点付近で埋土も異なり、上部は灰黄褐色極細粒砂、下部は褐灰色シルトを主体とする。出土遺物には弥生時代中期～奈良時代のものが含まれ、遺構の時期は奈良時代以降とみられるが、当遺跡における従前の事例から、近世以降の素掘り井戸の可能性も考えられる。

出土遺物として弥生土器や古墳時代～奈良時代の土師器、須恵器の破片がある（第47図1～4）。1は平板な形状を呈し、橙色の胎土から、古墳時代中期の移動式竈の罅部の破片とみられる。2は広口壺の口縁部で、口径11cmを計る。弥生時代中期（Ⅱ様式）の所産である。3は須恵器の杯で、口径は9.0cm。器高は浅く、低い立ち上がり部の傾斜は緩やかな特徴を有し、飛鳥時代の所産とみられる。4は土師器の杯で、小破片のため口径、傾きは不明。丸い体部から口縁部がやや外弯して広がり、端部内面には凹線による明瞭な段を設ける。胎土は精良で明赤褐色～橙色の色調を呈し、時期は8世紀とみられる。

ビット 直径15～55cm、深さ5～40cmのビット15個を検出した。調査範囲が狭いこともあり、配置に規則性は見出せない。SP-13、17、21など一部のビットには、断面に柱痕らしき土質の部分が確認され、柱穴とみられる。特異なのはSP-9で、掘り込みの角度は急で、他のビットにはない黒褐色の非常に細かなシルトを埋土とする。住居の跡ともみられたが、炭化物は含まれず、主柱穴も明らかではない。埋土の状況から柱穴ともみなしがたい。

SP-9からの出土遺物として、甕の破片4点がある（第47図6～9）。6は甕口縁部の破片で、推定口径18.8cm。くの字に開き、角度は推定である。体部には8本を単位とする櫛歯直線文が2条と、口縁端部には4mm間隔で刻目が施される。弥生時代中期初頭（Ⅱ様式）の所産とみられる。7・8も甕の口縁部で、推定口径15cm内外。いずれも逆八字形に直線的に開き、端部は短く上方につまみ上げ、端面はわずかに凹線状をなす。9も推定口径15cm程度、口縁部は逆八字形に真っ直ぐに開く。端部は斜め上方につま



第47図 第1トレンチ出土遺物(1/4)

み上げ、端面はかすかに窪む。7～9は弥生時代終末期を特徴とし、6は明らかに混入品である。遺構の時期も弥生時代終末期とみられる。

なお、第47図5はSP3から出土した壺の破片で、頸部下端部にあたるとみられる。頸部径9.6cm、外面に波状文がわずかに観察される。断面三角形の突帯を特徴とする摂津型の壺である。ピットの出土遺物は弥生土器に限られ、大半が同時代の所産とみられる。

(2) 第2トレンチ

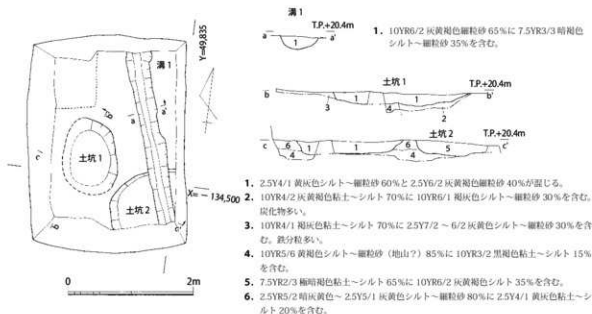
以前にあった共同住宅の基礎範囲外にあたり、攪乱を免れ、遺物包含層が良好に残されていた。

遺構面は、厚さ20～30cmの包含層の上面、及び包含層直下の地山層上面の2面が存在する。各遺構面の時期は、第1面がやや不明確ながら古墳時代後期～中世、第2面が弥生時代中期と推定される。

a. 第1面

溝 1 調査区東側を南北に走る溝で、幅30～35cm、深さ20cm、走行方位はW-18°20'-Nである。埋土は他の遺構埋土と大きく異なり、灰黄褐色の淡い色調を呈する。出土遺物は弥生土器や須恵器など混入品が大半を占めるが、1点のみ土師器の皿と見られる破片がある(第50図1)。器面の残りは悪いが、精良な胎土で浅黄褐色を呈するなど、中世以降の特徴を有する。底径6.4cmで、平坦な底部から口縁部が直線的に開く形状から、中世後期の所産とみられる。

溝 2 調査区南壁付近から須恵器がまとまって出土した。包含層上面からの掘り込みが確認され、溝、



第48図 第2トレンチ 第1面 平面図・遺構断面図(1/60・1/30)

もしくは土坑状の落ちとして識別できたものである(第49図南壁断面の1~3層)。埋土に流水を示す中粒砂の層を挟むことから、溝の可能性が高い。出土遺物には須恵器の甕破片の他、杯蓋がある(第50図2)。杯蓋は、推定口径12.6cm、器高3.8cm以上。口縁部の角度はほぼ垂直で、天井部と口縁部を分ける稜は鈍いながらも明瞭、口縁端部はやや凹面をなしシャープなつくりである。MT15形式併行期とみられ、6世紀前半に比定される。

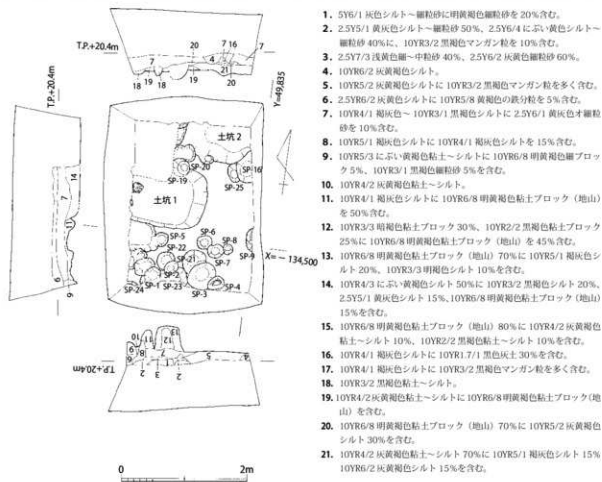
土坑1 東西0.9m、南北1.2m、深さ約20cmの不整形土坑である。埋土は包含層よりやや淡い色調を呈する程度であり、形状は明確に識別できなかった。出土遺物は弥生土器の薄片に限られるが、必ずしも時期を明確にするものではない。

土坑2 東西1m以上、南北0.8m以上、深さ約20cm。出土遺物は弥生土器の薄片に限られる。

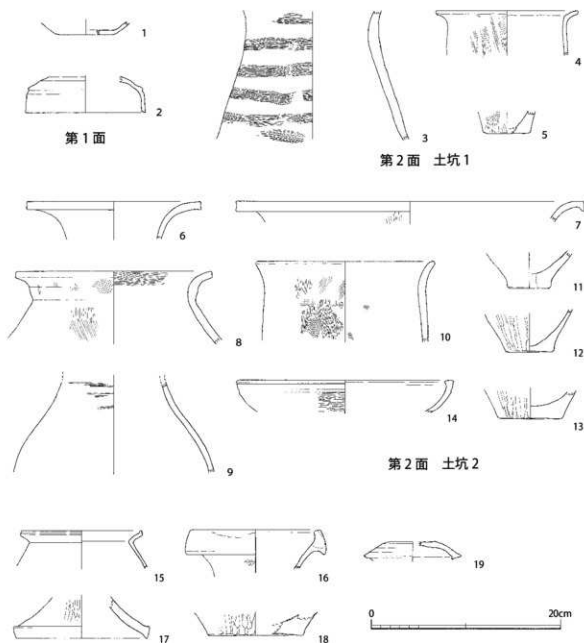
b. 第2面

土坑1 全体の形状は不明であるが、南辺、東辺ラインはやや直線的で、平面形は長方形を呈する。東西1.2m以上、南北1m、深さ15cmを計測し、底部はおおむね平坦に掘られる。底部付近から壺の破片1点が出土した(第50図3)。土圧で大きく二つに割れていたが、施文のある面を意図的に上に向けて置いたような出土状況を示す。また、埋土中から甕の破片(第50図4)も出土しており、いずれも、当遺構が弥生時代中期初頭の所産であることを示している。

広口壺(3)は頸部から体部上半にかけての破片で、頸部径14cmを計る。体部から頸部にかけて緩やかなカーブを描く。外面はハケ調整ののち約3cm間隔で櫛描直線文を6条以上施す。櫛描は完全な直線ではなく、上下にわずかな振れを伴う。また、図に示すように、上下ほぼ一列に施文の発着を示す若干の空隙と重複を認める。内面は磨滅が顕著である。甕(4)は口縁部から体部上半の破片で、推定口径



第49図 第2トレンチ 第2面 平面・断面図(1/30)



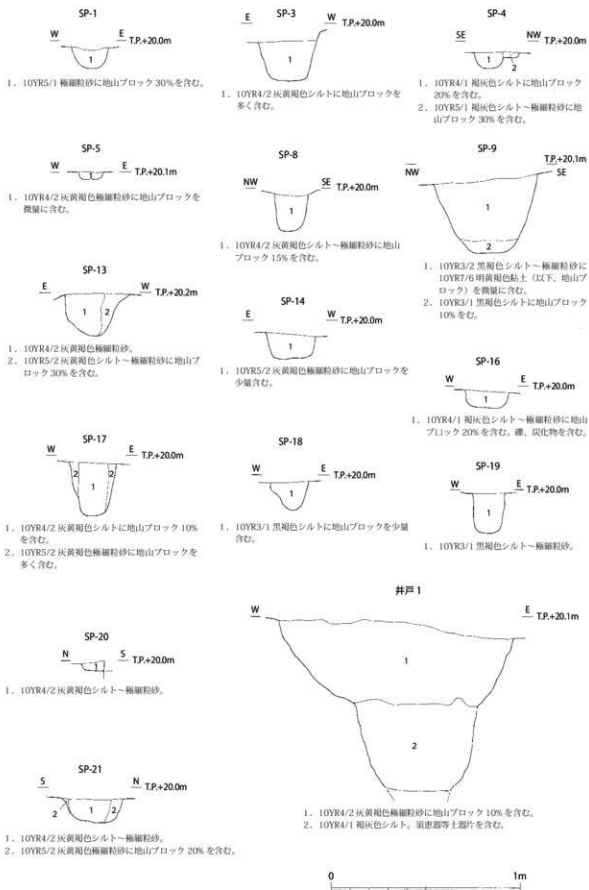
第50図 第2トレンチ出土遺物(1/4)

14.7cmを計る。ほぼ垂直に伸びる体部から口縁部がくの字に外反する。外面はハケ調整、内面は磨滅のため不明。いずれもⅡ様式の所産である。

土坑2 調査区の北端で検出した土坑で、大半が調査区外に伸びるため規模は不明。深さ15cmで灰黄褐色粘土～シルトを埋土とする。土坑西側から土器がかたまって出土した。

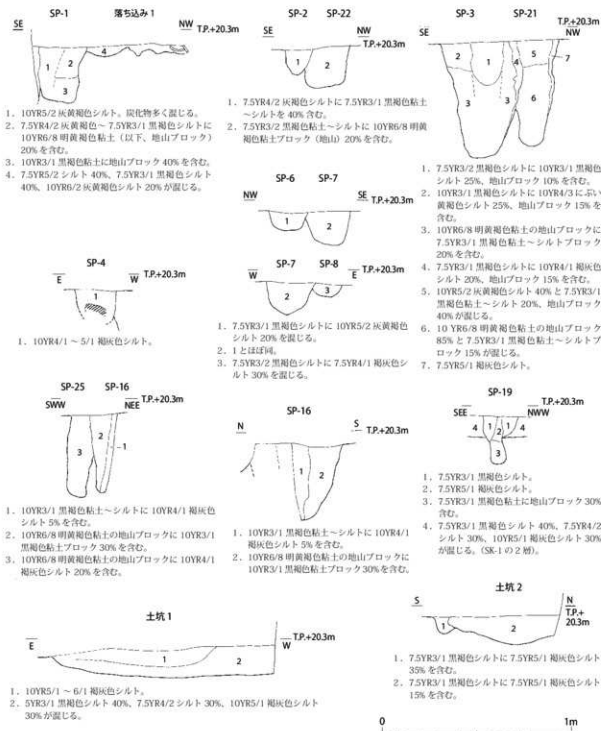
出土遺物(第50図6～13)として壺(6～9)、甕(10)、高杯(14)がある。壺はいずれも広口壺で、口径は、6が18.2cm、7が36.6cm、8は20.6cm、9は推定体部径21.6cmをそれぞれ計る。9の頸部付近には櫛描直線文2条と波状文1条がわずかに観察される。10は甕で、口径18.4cm。外面に縦方向の細かなハケ調整が施される。14は高杯の杯部とみられ、碗型の丸い体部と短く内弯する口縁部を有する。口縁部外面には上下2段に幅の狭い凹線、体部外面にはミガキが施される。これらの遺物は、甕などに古相を認める一方で、14の高杯など新しい様相を示すものが含まれ、おおむねⅣ様式初に位置づけられる。

柱穴・ピット 柱穴を含むピット18個以上を検出した。規模は直径15～45cm、深さ8～60cmである。これらのうち、SP-1・3・16・21・25は、第52図にも示すように、極めて深度が深く、柱痕を認める



第51図 第1トレンチ 遺構断面図 (1/20)

3. 調査の成果

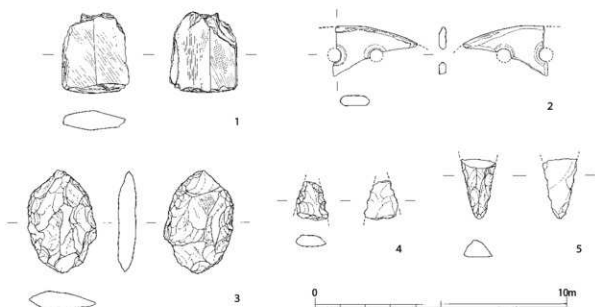


第 52 図 第 2 トレンチ 第 2 面 遺構断面図 (1/20)

ものが多いことから、建物の柱穴とみられる。中でも SP-3・21 は深さ 60cm、55cm を計り、新発遺跡としては最大級の深度をもつ。柱痕の直径はともに 15cm 以上を計ることから、相当程度の高さを有する建物であったと推定される。

出土遺物は土器の破片に限られるが、いずれも弥生土器で、建物も同時代の所産とみられる。

その他の土器 遺構検出時に出土した遺物を取り上げる（第 50 図 15～19）。15 は確認調査時に出土したもので、弥生時代中期の甕である。口径 12.5cm、く字に開く口縁部は端部を上方向につまみ上げ外面に凹線をめぐらす。16 は壺の口縁部で、口径 12.6cm、頸部から大きく開く口縁部は厚みを増し



第53図 石器実測図(2/3)

て内傾し、下端部をやや垂下させる。17は高杯の脚部で、底径13.6cm、外面はミガキ調整を施す。18は壺の底部であろう。底径10.2cm。16～18は弥生時代中期の所産である。19は須恵器の杯もしくは壺の蓋で、最大径10.2cm、上部に宝珠型のつまみがつくとみられる。

石器 遺構検出時もしくは遺構埋土中より5点の石器が出土した。遺構と直接的な関係を示す出土状況のものは皆無であり、すべて混入品とみられる。1は第2トレンチ第2面直上から出土した。磨製石剣の破片で、残存長3.1cm、幅2.7cm、厚さ0.8cm。夾雑物の少ない良質な黒色粘板岩を石材とし、両面とも鈍は明瞭で、製作時の研磨痕が明瞭に残る。刃部は鋭利でなく、左右とも幅3～4mmの前後の平滑な面をなす。また、下端部にも同様な滑らかな磨耗部が部分的に認められ、左右端と下端部の3方は破損後に研磨を目的とした何らかの加工工具として転用された可能性を示す。2は石庖丁の破片で、第2トレンチ第2面落ち込み1上層から出土した。左右3.3cm、上下2.0cm、厚さ3～4mm。1と同様、良質な黒色粘板岩を石材とする。弧状を呈する背部は、研磨により滑らかに仕上げられるが、表裏面ともに剥離面をほぼそのままにし、研磨の及ぶ範囲は一部にとどまる。1.7cmの間隔をあけて直径5mmの紐孔を二つあける。3はいわゆる楔形石器とみられる完形品で、第1トレンチ遺構面直上から出土した。長さ4.1cm、幅2.7cm、厚さ8mm。深い押圧剥離で楕葉形の全体形状をつくり、両辺(図の左右辺)は敲打・圧迫によるつぶれが顕著である。ごく一部に自然面を残す。4は石鏃の破片とみられ、第2トレンチ溝1から出土した。残存長1.5cm、残存幅1.3cm、厚さ4mm。5は石鏃の先端部とみられ、第2トレンチ第2面直上から出土した。残存長2.35cm、残存幅1.35cm、厚さ6.5mm。先端部分に磨耗の痕跡はなく、使用初期に折損し廃棄されたものとみられる。3～5の石材はすべてサヌカイトである。以上のほか、包含層や遺構埋土から大小のサヌカイトチップ(剥片)が26点出土している。

4. まとめ

調査の成果について、以下、簡潔にまとめる。

1 点目は、第Ⅱ様式の土器を伴う土坑を検出したことである。第Ⅱ様式の土器はこれまで第2次・第14次調査区で出土しており、中期初頭を開始期とする新免弥生集落は、遺構の集中する北部、西部2地域のうち西部域から始まることが、これまでの調査により推定される¹。西部域で実施した今回の調査は、この点をさらに補強したものと見える。

2 点目は、東・西隣接地の調査で推定されたように、調査地周辺が遺構密度の最も高い地域であることがあらためて検証されたことである。一部の柱穴は深さ 63cm に達するなど、遺構の残存状況も極めて良好であることが判明した。

3 点目は、井戸とみられる大型土坑の検出があげられる。遺物の時期にばらつきがあり厳密な時期は不明であり、全体の規模・形状も明らかではないが、断面形状などを見る限り、近世以降の素掘り井戸と共通する。井戸灌漑など用水不足を補完する遺構の可能性も考えられる。

4 点目は、磨製石剣の出土である。これまで当遺跡では、第 18 次、第 19 次で磨製石剣が出土しており、市内の弥生集落の中では比較的出土量が多いと言えるだろう。

なお、5 点目として、26 点のサヌカイトチップの出土があげられる。当遺跡でサヌカイトチップが多量に出土したのは、今回の調査地点以外では第 16 次調査などを挙げるに過ぎず、集落内における分業体制のあり方を反映したものと理解できるかもしれない。

【 註 】

1. 豊中市教育委員会『新免遺跡第 68・69・70 次発掘調査報告書』2018 年

第Ⅵ章 確認調査の成果

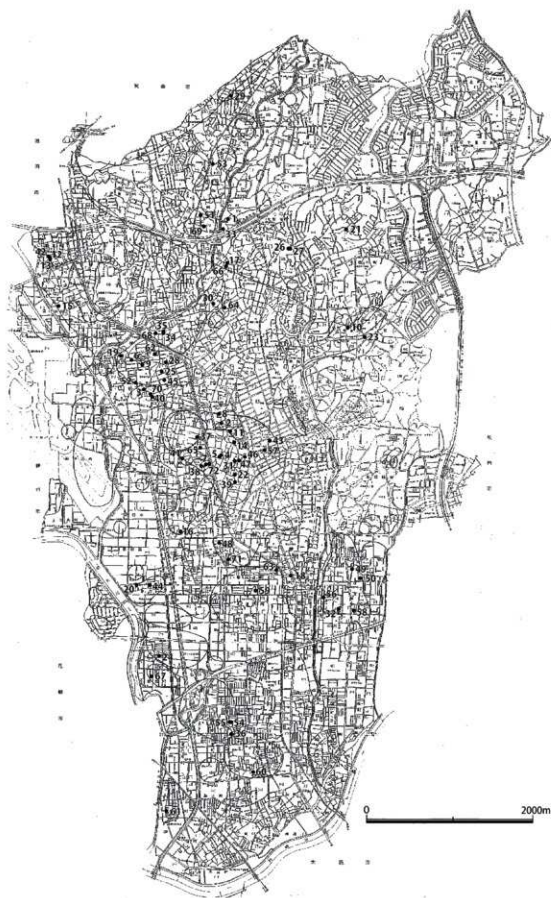
平成30年度（2018年度）1月から3月および令和元年度（2019年度）4月から12月の間に個人住宅を対象に行なった確認調査は72件を数え、平成30年度（2018年度）10件、令和元年度（2019年度）62件という内訳である。このうち、10件の調査で遺構等が確認され、うち3件については協議の結果、板塚古墳群第14次調査、新免遺跡第73次調査および小曾根遺跡第32次調査（今西氏屋敷第9次調査）として本格的な発掘調査を行うこととなった。残り7件については、建物に伴う基礎掘削が遺構面に達しないことや建物基礎部分の設計変更などから、本格的な発掘調査を行うには至っていない。

以下、確認調査の概要について報告する。第54図に掲載した調査地点位置図の番号および各確認調査の番号は、下表の番号に対応する。

第1表 令和元年（2019年）確認調査一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査原因	調査対象面積 (㎡)	遺構等 の有無	調査後の処置	調査者	備考
1	板井谷宮跡群	板の町6丁目29の一部	20190117	個人住宅建設	64.40	無	着工	橋田	
2	板塚古墳群	中板塚2丁目118-5	20190131	個人住宅建設	48.05	有	本調査（板塚古墳群14次）	橋田	
3	山ノ上遺跡	立花町1丁目123、123-2の一部	20190207	個人住宅建設	62.83	無	着工	陣内	
4	板塚古墳群	中板塚1丁目216-4の一部	20190221	個人住宅建設	94.39	未	着工	橋田	盛土内
5	板塚古墳群	中板塚1丁目217-1の一部	20190221	個人住宅建設	62.94	未	着工	橋田	包み替のみ
6	新免遺跡	玉井町3丁目23	20190228	個人住宅建設	49.68	無	着工	陣内	
7	板塚古墳群	岡町南1丁目68	20190228	個人住宅建設	37.72	無	着工	陣内	
8	板塚古墳群	中板塚2丁目155の一部	20190228	個人住宅建設	63.99	無	着工	陣内	
9	新免遺跡	玉井町3丁目60	20190328	個人住宅建設	198.88	有	本調査（新免73次）	小堀	
10	熊野山遺跡	熊野町3丁目40の一部	20190328	個人住宅建設	143.96	無	着工	小堀	
11	板塚古墳群・岡町遺跡	中板塚2丁目8-4	20190411	個人住宅建設	57.16	未	着工	小堀	盛土内
12	浪池北遺跡	浪池北町2丁目17-1、17-6の一部	20190411	個人住宅建設	64.39	無	着工	小堀	
13	浪池北遺跡	浪池北町2丁目17-1、17-6の一部	20190411	個人住宅建設	57.21	無	着工	小堀	
14	板塚古墳群	中板塚2丁目432-1、3-4の一部	20190411	個人住宅建設	49.97	未	着工	小堀	基礎浅
15	浪池西遺跡	浪池西町1丁目150-10	20190418	個人住宅建設	42.93	有	西立会後、慎重工事	橋田	設計変更
16	朝田遺跡	朝田元町3丁目144-7の一部	20190418	個人住宅建設	60.16	無	着工	橋田	
17	板井谷宮跡群	上野西4丁目249-1、3-8-9	20190418	個人住宅建設	99.11	未	着工	橋田	盛土内
18	榑崎遺跡	榑崎元町1丁目93の一部	20190425	個人住宅建設	100.12	有	西立会後、慎重工事	橋田	設計変更
19	新免遺跡	玉井町3丁目153-42	20190425	個人住宅建設	59.23	未	着工	橋田	盛土内
20	利倉遺跡	利倉2丁目915	20190509	個人住宅建設	159.58	無	着工	陣内	
21	板井谷宮跡群	東豊中3丁目202-7	20190509	個人住宅建設	81.15	未	着工	陣内	盛土内
22	板塚古墳群	南板塚1丁目60-17	20190509	個人住宅建設	53.16	無	着工	陣内	
23	熊野山遺跡	熊野町3丁目147-3、148-2、149-4	20190523	個人住宅建設	48.52	無	着工	陣内	
24	上津島遺跡	上津島2丁目148-45	20190523	個人住宅建設	50.88	無	着工	陣内	
25	新免遺跡	本広町1丁目101-6、7、8の各一部	20190523	個人住宅建設	76.18	有	西立会後、着工	服部	基礎浅
26	板井谷宮跡群	上野東3丁目562-1	20190530	個人住宅建設	53.50	無	着工	陣内	
27	板井谷宮跡群	上野東3丁目562-1	20190530	個人住宅建設	53.50	無	着工	陣内	
28	新免遺跡	玉井町1丁目138、139の一部	20190606	個人住宅建設	73.91	未	着工	橋田	耕作土内
29	大鼓塚古墳群	永楽荘2丁目307-3	20190613	個人住宅建設	147.02	無	着工	橋田	
30	本町遺跡	本町9丁目81-2	20190613	個人住宅建設	48.90	有	西立会後、着工	橋田	
31	板塚古墳群	南板塚1丁目87-1	20190620	個人住宅建設	91.28	無	着工	橋田	
32	小曾根遺跡・今西氏屋敷	浜1丁目435-8の一部	20190620	個人住宅建設	37.36	無	着工	橋田	
33	板井谷宮跡群	板の町6丁目167-1、2	20190627	個人住宅建設	149.73	未	着工	服部	盛土内
34	本町遺跡	本町2丁目105の一部、105-1の一部	20190627	個人住宅建設	57.20	可	慎重工事	橋田	基礎浅
35	本町遺跡	本町2丁目105の一部	20190627	個人住宅建設	60.90	可	慎重工事	橋田	基礎浅
36	島田遺跡	住内幸町3丁目107-3の一部	20190711	個人住宅建設	38.94	無	着工	陣内	
37	岡町北遺跡・板塚古墳群	岡町北1丁目21、21-1	20190711	個人住宅建設	62.26	未	着工	橋田	
38	板塚古墳群	岡町南1丁目83-1	20190718	個人住宅建設	61.92	無	着工	小堀	

番号	通称名	所在地	調査日	調査原因	調査対象 面積 (㎡)	調査 時期	調査後の処置	担当者	備考
39	桜塚古墳群	南桜塚1丁目 139-15	20100725	個人住宅建設	77.25	無	着工	小堀	
40	山ノ上道跡	立花町2丁目 93の一部	20100801	個人住宅建設	71.68	有	西立会後、慎重工事	小堀	盛土内
41	桜塚古墳群・岡町南道跡	岡町南2丁目 18-15	20100808	個人住宅建設	72.86	無	着工	小堀	
42	沼津北道跡	鎮西北町2丁目 17-1,6の一部	20100829	個人住宅建設	36.04	無	着工	小堀	
43	桜塚古墳群	南桜塚3丁目 79-4	20100829	個人住宅建設	62.47	有	西立会後、慎重工事	小堀	
44	利倉道跡	利倉1丁目 802-1の一部	20100905	個人住宅建設	110.76	無	着工	陣内	
45	新免道跡	末広町1丁目 124-4	20100905	個人住宅建設	70.83	無	着工	陣内	
46	桜塚古墳群	南桜塚1丁目 187-4	20100905	個人住宅建設	54.00	無	着工	陣内	
47	桜塚古墳群	南桜塚1丁目 37-2	20100912	個人住宅建設	49.68	無	着工	服部	
48	豊島北道跡	曾根南町1丁目 102-2,9	20100912	個人住宅建設	63.76	無	着工	陣内	
49	小曾根道跡	北条町3丁目 121-16,17	20100912	個人住宅建設	87.45	無	着工	服部	
50	小曾根道跡	北条町3丁目 156-1の一部	20100919	個人住宅建設	51.79	未	着工	小堀	盛土内
51	内田道跡	板の町3丁目 26-10	20100919	個人住宅建設	47.44	未	着工	小堀	盛土内
52	新免道跡	立花町1丁目 132-10	20101003	個人住宅建設	50.00	有	西立会後、着工	小堀	
53	少路道跡	春日町2丁目 13-3	20101010	個人住宅建設	62.85	未	着工	橋田	耕作土内
54	島田道跡	庄内幸町3丁目 99-1の一部	20101010	個人住宅建設	60.66	無	着工	陣内	
55	島田道跡	庄内幸町3丁目 99-1の一部	20101010	個人住宅建設	60.66	無	着工	陣内	
56	小曾根道跡	浜1丁目 356-5	20101017	個人住宅建設	60.62	有	本調査（小曾根 32 次）	橋田	
57	桜塚古墳群	南桜塚3丁目 108	20101017	個人住宅建設	83.84	未	着工	橋田	盛土内
58	小曾根道跡	小曾根1丁目 483-6	20101017	個人住宅建設	36.85	無	着工	陣内	
59	榑崎道跡	服部内町2丁目 62-13	20101024	個人住宅建設	64.29	無	着工	橋田	
60	庄内道跡	庄内幸町3丁目 21-1の一部	20101024	個人住宅建設	67.96	無	着工	陣内	
61	庄本道跡	庄本町3丁目 139-1の一部	20101031	個人住宅建設	75.21	無	着工	陣内	
62	新免道跡	玉井町2丁目 55, 55-2,3	20101031	個人住宅建設	155.27	未	着工	橋田	盛土内
63	榑崎道跡	服部幸町1丁目 203-2	20101031	個人住宅建設	160.10	無	着工	陣内	
64	金ヶ山庚寺	本町8丁目 123-4の一部	20101114	個人住宅建設	55.95	無	着工	橋田	
65	桜塚古墳群	岡町南1丁目 29-1	20101114	個人住宅建設	63.82	無	着工	橋田	
66	桜井谷沢郡	上野西4丁目 252の一部	20101114	個人住宅建設	48.02	未	着工	橋田	盛土内
67	上野島南道跡	今在家町 181-3	20101121	個人住宅建設	38.88	未	着工	橋田	盛土内
68	本町道跡	本町2丁目 97-6	20101121	個人住宅建設	46.65	無	着工	陣内	
69	内田道跡	板の町3丁目 43-6,8,12	20101205	個人住宅建設	63.92	未	着工	陣内	盛土内
70	山ノ上道跡	立花町1丁目 64	20101212	個人住宅建設	77.84	未	着工	陣内	耕作土内
71	豊島北道跡	曾根南町1丁目 156-16の一部	20101219	個人住宅建設	41.62	可	着工	橋田	
72	桜塚古墳群	岡町南1丁目 52-5の一部	20101226	個人住宅建設	44.04	未	着工	陣内	盛土内



第 54 図 確認調査地点位置図

2019－01 桜井谷窯跡群

調査日：平成 31 年（2019 年）1 月 18 日

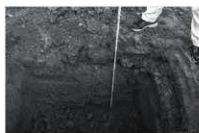
調査場所：豊中市桜の町 6 丁目 29 の一部

調査対象面積：64.40㎡

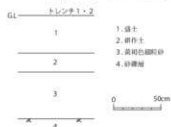
調査の方法：重機によりトレンチ 2 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 120cm において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 55 図 トレンチ掘削状況



第 56 図 トレンチ断面図

2019－02 桜塚古墳群

調査日：平成 31 年（2019 年）1 月 31 日

調査場所：豊中市桜塚 2 丁目 118－5

調査対象面積：48.05㎡

調査の方法：重機により筋掘りトレンチ 1 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

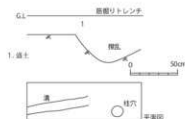
調査の概要：地表下 20cm において基盤層を確認し、その直上で溝及び柱穴を検出した。

調査後の処置：協議後、発掘調査を行う。

（桜塚古墳群第 14 次調査）



第 57 図 トレンチ掘削状況



第 58 図 トレンチ平面・断面図

2019－03 山ノ上遺跡

調査日：平成 31 年（2019 年）2 月 7 日

調査場所：豊中市立花町 1 丁目 123,123-2 の一部

調査対象面積：62.83㎡

調査の方法：重機によりトレンチ 1 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 90cm において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 59 図 トレンチ掘削状況



第 60 図 トレンチ断面図

2019 - 04 桜塚古墳群

調査日：平成 31 年 (2019 年) 2 月 21 日

調査場所：豊中市桜塚 1 丁目 216 - 4 の各一部

調査対象面積：94.39㎡ (44.71㎡ + 49.68㎡)

調査の方法：重機により各敷地にトレンチを 1 か所ずつ掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ 2 の地表下 65cm において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認できなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 61 図 トレンチ掘削状況



第 62 図 トレンチ断面図

2019 - 05 桜塚古墳群

調査日：平成 31 年 (2019 年) 2 月 21 日

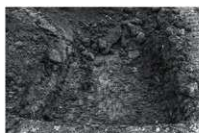
調査場所：豊中市桜塚 1 丁目 217 - 1 の一部

調査対象面積：62.94㎡

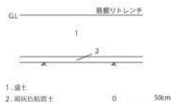
調査の方法：重機により掘削トレンチ 1 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 45cm において包含層に類似する褐色粘質土層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認できなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 63 図 トレンチ掘削状況



第 64 図 トレンチ断面図

2019 - 06 新免遺跡

調査日：平成 31 年 (2019 年) 2 月 28 日

調査場所：豊中市玉井町 3 丁目 23

調査対象面積：49.68㎡

調査の方法：重機によりトレンチ 2 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ 2 の地表下 40cm において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認できなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 65 図 トレンチ掘削状況



第 66 図 トレンチ断面図

2019－07 桜塚古墳群

調査日：平成 31 年（2019 年）2 月 28 日

調査場所：豊中市岡町南 1 丁目 68

調査対象面積：37.72㎡

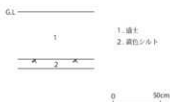
調査の方法：重機によりトレンチ 1 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 50cm において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 67 図 トレンチ掘削状況



第 68 図 トレンチ断面図

2019－08 桜塚古墳群

調査日：平成 31 年（2019 年）2 月 28 日

調査場所：豊中市桜塚 2 丁目 155 の一部

調査対象面積：63.99㎡

調査の方法：重機により掘削トレンチ 1 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 55cm において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 69 図 トレンチ掘削状況



第 70 図 トレンチ断面図

2019－09 新免遺跡

調査日：平成 31 年（2019 年）3 月 28 日

調査場所：豊中市玉井町 3 丁目 60

調査対象面積：198.88㎡

調査の方法：重機により掘削トレンチ 3 か所と掘削トレンチ 1 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ 1・2 の地表下 100cm において、遺構（ピット及び土坑？）を検出した。

調査後の処置：協議後、発掘調査を行う。



第 71 図 トレンチ掘削状況



第 72 図 トレンチ平面・断面図

（新免遺跡第 73 次調査）

2019 - 10 熊野田遺跡

調査日：平成 31 年 (2019 年) 3 月 28 日

調査場所：豊中市熊野町 3 丁目 40 の一部

調査対象面積：143.96㎡

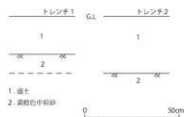
調査の方法：重機によりトレンチ 2 か所を掘削し、
トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 20・30cm において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 73 図 トレンチ掘削状況



第 74 図 トレンチ断面図

2019 - 11 桜塚古墳群・岡町遺跡

調査日：平成 31 年 (2019 年) 4 月 11 日

調査場所：豊中市桜塚 2 丁目 8 - 4

調査対象面積：57.16㎡

調査の方法：重機により筋掘りトレンチ 2 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度 (地表下 100cm) 内において、
明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 75 図 トレンチ掘削状況



第 76 図 トレンチ断面図

2019 - 12 蛸池北遺跡

調査日：平成 31 年 (2019 年) 4 月 11 日

調査場所：豊中市蛸池北町 2 丁目 17 - 1、- 6
の一部

調査対象面積：64.39㎡

調査の方法：重機によりトレンチ 1 か所を掘削し、
トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 40cm において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 77 図 トレンチ掘削状況



第 78 図 トレンチ断面図

2019 - 13 蛭池北遺跡

調査日：平成 31 年（2019 年）4 月 11 日

調査場所：豊中市蛭池北町 2 丁目 17 - 1、- 6
の一部

調査対象面積：57.21㎡

調査の方法：重機によりトレンチ 1 か所を掘削し、
トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 60cm において基盤層を検出した
が、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 79 図 トレンチ掘削状況



第 80 図 トレンチ断面図

2019 - 14 桜塚古墳群

調査日：平成 31 年（2019 年）4 月 11 日

調査場所：豊中市中桜塚 2 丁目 432 - 1、- 3、- 4
の一部

調査対象面積：49.97㎡

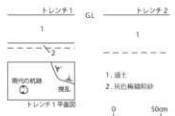
調査の方法：重機によりトレンチ 2 か所を掘削し、
トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下 45cm）内において、
明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 81 図 トレンチ掘削状況



第 82 図 トレンチ平面・断面図

2019 - 15 蛭池西遺跡

調査日：平成 31 年（2019 年）4 月 18 日

調査場所：豊中市蛭池西町 1 丁目 50 - 10

調査対象面積：42.93㎡

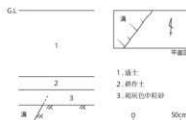
調査の方法：重機によりトレンチ 1 か所を掘削し、
トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 100cm において、溝 1 条を検出
した。

調査後の処置：設計変更により遺構の損壊は免れる
ことから、再立会後、慎重工事を指示。



第 83 図 トレンチ掘削状況



第 84 図 トレンチ平面・断面図

2019 - 16 原田遺跡

調査日：平成 31 年 (2019 年) 4 月 18 日

調査場所：豊中市原田元町 3 丁目 144 - 7 の一部

調査対象面積：60.16㎡

調査の方法：重機によりトレンチ 2 か所を掘削し、
トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 35cm において基盤層を検出した
が、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 85 図 トレンチ掘削状況



第 86 図 トレンチ断面図

2019 - 17 桜井谷窯跡群

調査日：平成 31 年 (2019 年) 4 月 18 日

調査場所：豊中市上野西 4 丁目

249 - 1, - 3, - 8, - 9

調査対象面積：99.11㎡

調査の方法：重機によりトレンチ 2 か所を掘削し、
トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下 50cm）内において、
明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 87 図 トレンチ掘削状況



第 88 図 トレンチ断面図

2019 - 18 穂積遺跡

調査日：平成 31 年 (2019 年) 4 月 25 日

調査場所：豊中市服部元町 1 丁目 93 の一部

調査対象面積：100.12㎡

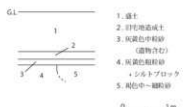
調査の方法：重機によりトレンチ 1 か所を掘削し、
トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 100cm において包含層を、地表
下 110cm において中世後期の遺構面上から土坑を
検出した。

調査後の処置：設計変更により遺構の損壊は免れる
ことから、再立会後、着工を指示。



第 89 図 トレンチ掘削状況



第 90 図 トレンチ断面図

2019 - 19 新免遺跡

調査日：平成 31 年（2019 年）4 月 25 日

調査場所：豊中市玉井町 3 丁目 153 - 42

調査対象面積：59.23㎡

調査の方法：重機によりトレンチ 2 か所を掘削し、
トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下 50cm）内において、
明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 91 図 トレンチ掘削状況



第 92 図 トレンチ断面図

2019 - 20 利倉遺跡

調査日：令和元年（2019 年）5 月 9 日

調査場所：豊中市利倉 2 丁目 915

調査対象面積：159.58㎡

調査の方法：重機によりトレンチ 2 か所を掘削し、
トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下 185cm）内において
明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 93 図 トレンチ掘削状況



第 94 図 トレンチ断面図

2019 - 21 桜井谷窯跡群

調査日：令和元年（2019 年）5 月 9 日

調査場所：豊中市東豊中 3 丁目 202 - 7

調査対象面積：81.15㎡

調査の方法：重機により筋掘りトレンチ 1 か所を掘
削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下 110cm）内において、
明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 95 図 トレンチ掘削状況



第 96 図 トレンチ断面図

2019 - 22 桜塚古墳群

調査日：令和元年(2019年)5月9日

調査場所：豊中市南桜塚1丁目60-17

調査対象面積：53.16㎡

調査の方法：重機により掘掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下85cmにおいて基盤層を検出したが、古墳関連の明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第97図 トレンチ掘削状況



第98図 トレンチ断面図

2019 - 23 熊野田遺跡

調査日：令和元年(2019年)5月23日

調査場所：豊中市熊野町3丁目

147-3、148-2、149-4

調査対象面積：48.52㎡

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度(地表下160cm)内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第99図 トレンチ掘削状況



第100図 トレンチ断面図

2019 - 24 上津島遺跡

調査日：令和元年(2019年)5月23日

調査場所：豊中市上津島2丁目148-45

調査対象面積：50.88㎡

調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度(地表下150cm)内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第101図 トレンチ掘削状況



第102図 トレンチ断面図

2019 - 25 新免遺跡

調査日：令和元年（2019 年）5 月 23 日

調査場所：豊中市末広町 1 丁目

101 - 6、- 7、- 8 の各一部

調査対象面積：76.18㎡

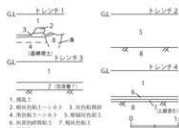
調査の方法：重機により掘りトレンチ 3 か所、掘りトレンチ 1 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ 1・3・4 において中世の包含層を、トレンチ 1 の地表下 65cm において遺構面を検出した。

調査後の処置：基礎深度は包含層中にとどまるため、再立会後、着工を指示。



第 103 図 トレンチ掘削状況



第 104 図 トレンチ断面図

2019 - 26 桜井谷窯跡群

調査日：令和元年（2019 年）5 月 30 日

調査場所：豊中市上野東 3 丁目 562 - 1

調査対象面積：53.50㎡

調査の方法：重機により掘りトレンチ 1 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 20cm において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 105 図 トレンチ掘削状況



第 106 図 トレンチ断面図

2019 - 27 桜井谷窯跡群

調査日：令和元年（2019 年）5 月 30 日

調査場所：豊中市上野東 3 丁目 562 - 1

調査対象面積：53.50㎡

調査の方法：重機により掘りトレンチ 1 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 35cm において基盤層を検出したが、窯跡関連の明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 107 図 トレンチ掘削状況



第 108 図 トレンチ断面図

2019 - 28 新免遺跡

調査日：令和元年(2019年)6月6日
 調査場所：豊中市玉井町1丁目138・139の各一部
 調査対象面積：73.91㎡
 調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、
 トレンチ内を精査した。
 調査の概要：掘削深度(地表下40cm)内において、
 明確な遺構・遺物等は確認されなかった。
 調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第109図 トレンチ掘削状況



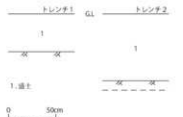
第110図 トレンチ断面図

2019 - 29 太鼓塚古墳群

調査日：令和元年(2019年)6月13日
 調査場所：豊中市永楽荘2丁目307-3
 調査対象面積：147.02㎡
 調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、
 トレンチ内を精査した。
 調査の概要：地表下40・70cmにおいて基盤層を検出
 したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。
 調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第111図 トレンチ掘削状況



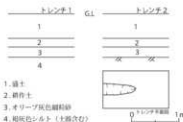
第112図 トレンチ断面図

2019 - 30 本町遺跡

調査日：令和元年(2019年)6月13日
 調査場所：豊中市本町9丁目81-2
 調査対象面積：48.90㎡
 調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、
 トレンチ内を精査した。
 調査の概要：トレンチ1において大型遺構の埋土と
 考えられる包含層を、トレンチ2において溝を検
 出した。
 調査後の処置：計画変更により遺構の損壊は免れる
 ことから、再立会後、着工を指示。



第113図 トレンチ掘削状況



第114図 トレンチ平面・断面図

2019－31 桜塚古墳群

調査日：令和元年（2019年）6月20日

調査場所：豊中市南桜塚1丁目87－1

調査対象面積：91.28㎡

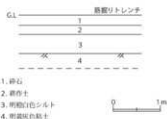
調査の方法：重機により掘削トレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下80cmにおいて基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第115図 トレンチ掘削状況



第116図 トレンチ断面図

2019－32 小曽根遺跡・今西氏屋敷

調査日：令和元年（2019年）6月20日

調査場所：豊中市浜1丁目435－8の一部

調査対象面積：37.36㎡

調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下110cm）内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第117図 トレンチ掘削状況



第118図 トレンチ断面図

2019－33 桜井谷窯跡群

調査日：令和元年（2019年）6月27日

調査場所：豊中市桜の町6丁目167－1、－2

調査対象面積：149.73㎡

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下40cm）内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第119図 トレンチ断面図

2019 - 34 本町遺跡

調査日：令和元年(2019年)6月27日

調査場所：豊中市本町2丁目105、105-1の一部

調査対象面積：57.20㎡

調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下45cmにおいて、包含層を検出した。

調査後の処置：基礎深度は包含層直上に収まることから、確認調査後、慎重工事を指示。



第120図 トレンチ掘削状況



第121図 トレンチ断面図



第122図 トレンチ掘削状況



第123図 トレンチ断面図

2019 - 36 島田遺跡

調査日：令和元年(2019年)7月11日

調査場所：豊中市庄内幸町3丁目107-3の一部

調査対象面積：38.94㎡

調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度(地表下150cm)内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第124図 トレンチ掘削状況



第125図 トレンチ断面図

2019－37 岡町北遺跡・桜塚古墳群

調査日：令和元年（2019年）7月11日

調査場所：豊中市岡町北1丁目21、21－1

調査対象面積：62.26㎡

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下40cm）内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第126図 トレンチ掘削状況



第127図 トレンチ断面図

2019－38 桜塚古墳群

調査日：令和元年（2019年）7月18日

調査場所：豊中市岡町南1丁目83－1

調査対象面積：61.92㎡

調査の方法：重機により筋掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下20cmにおいて基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第128図 トレンチ掘削状況



第129図 トレンチ断面図

2019－39 桜塚古墳群

調査日：令和元年（2019年）7月25日

調査場所：豊中市南桜塚1丁目139－15

調査対象面積：77.25㎡

調査の方法：重機により筋掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下30cmにおいて基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第130図 トレンチ掘削状況



第131図 トレンチ断面図

2019 - 40 山ノ上遺跡

調査日：令和元年(2019年)8月1日

調査場所：豊中市立花町2丁目93の一部

調査対象面積：71.68㎡

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、
トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下50～60cmにおいて包含層を、
トレンチ2の地表下60cmにおいて溝状遺構及び
ピットを検出した。

調査後の処置：基礎深度は盛土内に収まるため、再
立会後、慎重工事を指示。



第132図 トレンチ掘削状況



第133図 トレンチ平面・断面図

2019 - 41 桜塚古墳群・岡町南遺跡

調査日：令和元年(2019年)8月8日

調査場所：豊中市岡町南2丁目18-15

調査対象面積：72.86㎡

調査の方法：重機により掘削トレンチ1か所を掘
削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：盛土直下より池状の堆積層を検出した。

調査後の処置：池状の堆積層は近世以降のものと考えられるため、確認調査後、着工を指示。



第134図 トレンチ掘削状況



第135図 トレンチ断面図

2019 - 42 蛭池北遺跡

調査日：令和元年(2019年)8月29日

調査場所：豊中市蛭池北町2丁目

17-1, -6の一部

調査対象面積：36.04㎡

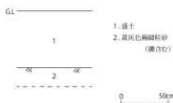
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、
トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下60cmにおいて基盤層を検出した
が、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第136図 トレンチ掘削状況



第137図 トレンチ断面図

2019－43 桜塚古墳群

調査日：令和元年（2019年）8月29日

調査場所：豊中市南桜塚3丁目79-4

調査対象面積：62.47㎡

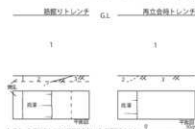
調査の方法：重機により筋掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下45cmにおいて、御獅子塚古墳の周濠を検出した。

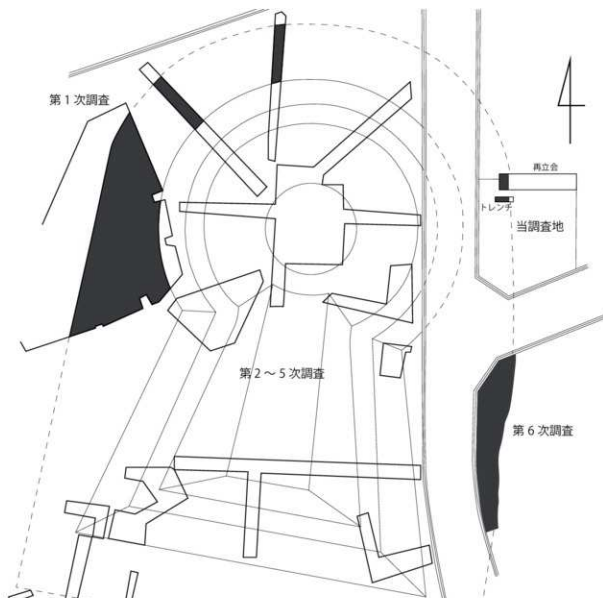
調査後の処置：基礎深度は周濠検出深度の直上にあたるため、再立会后、慎重工事を指示。



第138図 トレンチ掘削状況



第139図 トレンチ平面・断面図



第140図 トレンチ位置図

2019 - 44 利倉遺跡

調査日：令和元年(2019年)9月5日

調査場所：豊中市利倉1丁目892-1の一部

調査対象面積：110.76㎡

調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度(地表下160cm)内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第141図 トレンチ掘削状況



第142図 トレンチ断面図

2019 - 45 新免遺跡

調査日：令和元年(2019年)9月5日

調査場所：豊中市末広町1丁目124-1

調査対象面積：70.83㎡

調査の方法：重機により筋掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下35cmにおいて基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第143図 トレンチ掘削状況



第144図 トレンチ断面図

2019 - 46 桜塚古墳群

調査日：令和元年(2019年)9月5日

調査場所：豊中市南桜塚1丁目187-1

調査対象面積：54.00㎡

調査の方法：重機により筋掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度(地表下175cm)内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第145図 トレンチ掘削状況



第146図 トレンチ断面図

2019 - 47 桜塚古墳群

調査日：令和元年(2019年)9月12日

調査場所：豊中市南桜塚1丁目37-2

調査対象面積：49.68㎡

調査の方法：重機により掘削トレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下20cmにおいて基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第147図 トレンチ掘削状況



第148図 トレンチ断面図

2019 - 48 豊島北遺跡

調査日：令和元年(2019年)9月12日

調査場所：豊中市曾根南町1丁目102-2、-9

調査対象面積：63.76㎡

調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度(地表下170cm)内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第149図 トレンチ掘削状況



第150図 トレンチ断面図

2019 - 49 小曽根遺跡

調査日：令和元年(2019年)9月12日

調査場所：豊中市北条町3丁目121-16、-17

調査対象面積：87.45㎡

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度(地表下170cm)内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第151図 トレンチ掘削状況



第152図 トレンチ断面図

2019 - 50 小曾根遺跡

調査日：令和元年(2019年)9月19日

調査場所：豊中市北条町3丁目156-1の一部

調査対象面積：51.79㎡

調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度(地表下40cm)内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第153図 トレンチ掘削状況



第154図 トレンチ断面図



第155図 トレンチ掘削状況



第156図 トレンチ断面図

2019 - 52 新免遺跡

調査日：令和元年(2019年)10月3日

調査場所：豊中市立花町1丁目132-10

調査対象面積：50.00㎡

調査の方法：重機により筋掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下115cmにおいて、遺物を多く含む遺構埋土を検出した。

調査後の処置：計画変更により遺構の損壊は免れることから、再立会後、着工を指示。



第157図 トレンチ掘削状況



第158図 トレンチ断面図

2019－53 少路遺跡

調査日：令和元年（2019年）10月10日

調査場所：豊中市春日町2丁目13－3

調査対象面積：62.85㎡

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、
トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下70cm）内において、
明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第159図 トレンチ掘削状況



第160図 トレンチ断面図

2019－54 島田遺跡

調査日：令和元年（2019年）10月10日

調査場所：豊中市庄内幸町3丁目99－1の一部

調査対象面積：60.66㎡

調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、
トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下170cm）内において、
明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第161図 トレンチ掘削状況



第162図 トレンチ断面図

2019－55 島田遺跡

調査日：令和元年（2019年）10月10日

調査場所：豊中市庄内幸町3丁目99－1の一部

調査対象面積：60.66㎡

調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、
トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下170cm）内において、
明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第163図 トレンチ掘削状況



第164図 トレンチ断面図

2019 - 56 小曾根遺跡

調査日：令和元年(2019年)10月17日

調査場所：豊中市浜1丁目356-5

調査対象面積：60.62㎡

調査の方法：重機により筋掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

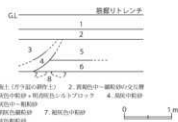
調査の概要：地表下70cm前後において、今西氏屋敷の外堀と考えられる大規模な溝を検出した。

調査後の処置：協議後、発掘調査を行う。

(小曾根遺跡第32次調査[今西氏屋敷第9次調査])



第165図 トレンチ掘削状況



第166図 トレンチ断面図

2019 - 57 桜塚古墳群

調査日：令和元年(2019年)10月17日

調査場所：豊中市南桜塚3丁目108

調査対象面積：83.84㎡

調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度(地表下50cm)内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第167図 トレンチ掘削状況



第168図 トレンチ断面図

2019 - 58 小曾根遺跡

調査日：令和元年(2019年)10月17日

調査場所：豊中市小曾根1丁目483-6

調査対象面積：36.85㎡

調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度(地表下210cm)内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第169図 トレンチ掘削状況



第170図 トレンチ断面図

2019－59 穂積遺跡

調査日：令和元年（2019年）10月24日

調査場所：豊中市服部西町2丁目62－13

調査対象面積：64.29㎡

調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下220cm）内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第171図 トレンチ掘削状況



第172図 トレンチ断面図

2019－60 庄内遺跡

調査日：令和元年（2019年）10月24日

調査場所：豊中市庄内幸町5丁目21－1の一部

調査対象面積：67.96㎡

調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下170cm）内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第173図 トレンチ掘削状況



第174図 トレンチ断面図

2019－61 庄本遺跡

調査日：令和元年（2019年）10月31日

調査場所：豊中市庄本町3丁目139－1の一部

調査対象面積：75.21㎡

調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下190cm）内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第175図 トレンチ掘削状況



第176図 トレンチ断面図

2019 - 62 新免遺跡

調査日：令和元年(2019年)10月31日

調査場所：豊中市玉井町2丁目55、55-2、-3

調査対象面積：155.27㎡

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度(地表下50cm)内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第177図 トレンチ掘削状況

GL トレンチ1・2

1

1. 遺土



第178図 トレンチ断面図

2019 - 63 穂積遺跡

調査日：令和元年(2019年)10月31日

調査場所：豊中市服部豊町1丁目203-2

調査対象面積：160.10㎡

調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度(地表下200cm)内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第179図 トレンチ掘削状況

GL

1

1. 遺土

2. 灰色陶磁器砂
(耕作土)

3. 青灰色細～細粒砂

4. 黄灰色陶磁器砂

5. 灰白色細粒砂

0 1m

2

3

4

5

第180図 トレンチ断面図

2019 - 64 金寺山廃寺

調査日：令和元年(2019年)11月14日

調査場所：豊中市本町8丁目123-4の一部

調査対象面積：55.95㎡

調査の方法：重機により掘削トレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下80・160cmにおいて基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第181図 トレンチ掘削状況

掘削トレンチ1 GL 掘削トレンチ2

1

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

36

37

38

39

40

41

42

43

44

45

46

47

48

49

50

51

52

53

54

55

56

57

58

59

60

61

62

63

64

65

66

67

68

69

70

71

72

73

74

75

76

77

78

79

80

81

82

83

84

85

86

87

88

89

90

91

92

93

94

95

96

97

98

99

100

101

102

103

104

105

106

107

108

109

110

111

112

113

114

115

116

117

118

119

120

121

122

123

124

125

126

127

128

129

130

131

132

133

134

135

136

137

138

139

140

141

142

143

144

145

146

147

148

149

150

151

152

153

154

155

156

157

158

159

160

161

162

163

164

165

166

167

168

169

170

171

172

173

174

175

176

177

178

179

180

181

182

183

184

185

186

187

188

189

190

191

192

193

194

195

196

197

198

199

200

201

202

203

204

205

206

207

208

209

210

211

212

213

214

215

216

217

218

219

220

221

222

223

224

225

226

227

228

229

230

231

232

233

234

235

236

237

238

239

240

241

242

2019－65 桜塚古墳群

調査日：令和元年（2019年）11月14日

調査場所：豊中市岡町南1丁目29－1

調査対象面積：63.82㎡

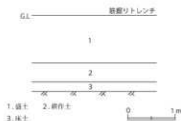
調査の方法：重機により筋掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下80cmにおいて基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第183図 トレンチ掘削状況



第184図 トレンチ断面図

2019－66 桜井谷窯跡群

調査日：令和元年（2019年）11月14日

調査場所：豊中市上野西4丁目252の一部

調査対象面積：48.02㎡

調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下200cmまで、池沼の埋め立てに伴う盛土であることが確認された。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第185図 トレンチ掘削状況



第186図 トレンチ断面図

2019－67 上津島南遺跡

調査日：令和元年（2019年）11月21日

調査場所：豊中市今在家町181－3

調査対象面積：38.88㎡

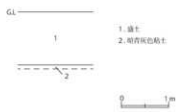
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下120cm）内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第187図 トレンチ掘削状況



第188図 トレンチ断面図

2019 - 68 本町遺跡

調査日：令和元年(2019年)11月21日

調査場所：豊中市本町2丁目97-6

調査対象面積：46.65㎡

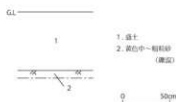
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、
トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下62cmにおいて基盤層を検出した
が、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第189図 トレンチ掘削状況



第190図 トレンチ断面図

2019 - 69 内田遺跡

調査日：令和元年(2019年)12月5日

調査場所：豊中市桜の町3丁目43-6、-8、-12

調査対象面積：63.82㎡

調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、
トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度(地表下80cm)内において、
明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第191図 トレンチ掘削状況



第192図 トレンチ断面図

2019 - 70 山ノ上遺跡

調査日：令和元年(2019年)12月12日

調査場所：豊中市立花町1丁目64

調査対象面積：77.84㎡

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、
トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度(地表下40cm)内において、
明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第193図 トレンチ掘削状況



第194図 トレンチ断面図

2019－71 豊島北遺跡

調査日：令和元年（2019年）12月19日

調査場所：豊中市曾根南町1丁目156－16の一部

調査対象面積：41.62㎡

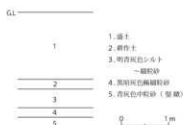
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、
トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下220cm）内において、
明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第195図 トレンチ掘削状況



第196図 トレンチ断面図

2019－72 桜塚古墳群

調査日：令和元年（2019年）12月26日

調査場所：豊中市岡町南1丁目52－5の一部

調査対象面積：44.04㎡

調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、
トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下50cm）内において、
明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第197図 トレンチ掘削状況

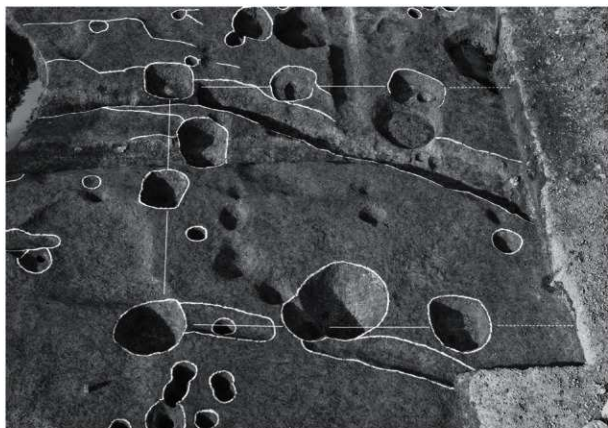


第198図 トレンチ断面図

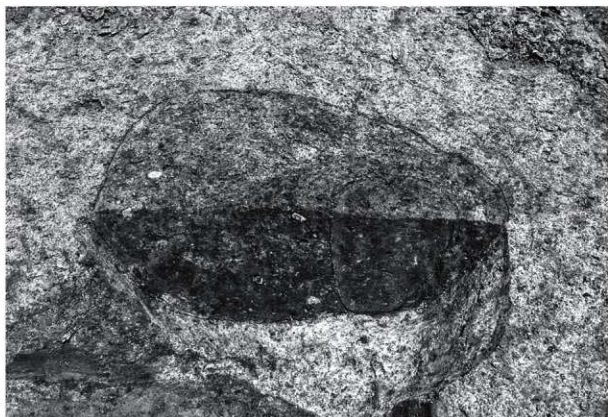
圖 版



(1) 調査区全景



(1) 建物 1



(2) SP- 1 (建物 1 柱穴)



(1) 住居1



(2) 住居1土層断面1



(3) 住居1土層断面2 (南壁面拡大)



(1) 土坑 3



(2) 土坑 4 土層断面



(1) 溝1



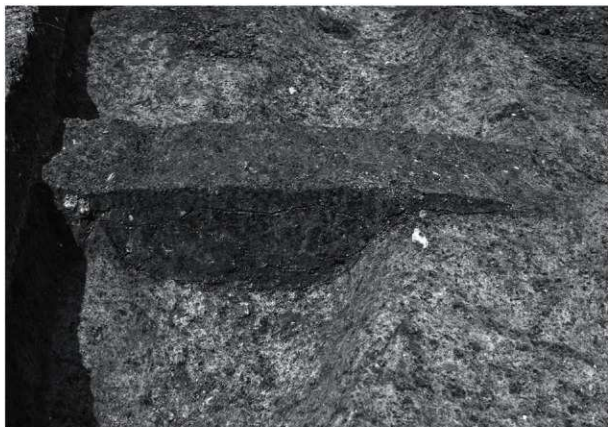
(2) 溝1土層断面



(1) 溝 1 遺物出土状況 1



(2) 溝 1 遺物出土状況 2



(1) 溝2土層断面



(2) 溝3土層断面



(1) 調査区全景1 (北区)



(2) 調査区全景2 (南区)



(1) SP1・SP2 土層断面



(2) 溝1 土層断面



(1) 調査区全景1 (北区)



(2) 調査区全景2 (南区)



(1) 土坑群2土層断面



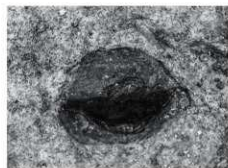
(2) SP-3 土層断面



(1) 第1トレンチ全景（掘削前）



(2) 第1トレンチ 土坑1土層断面



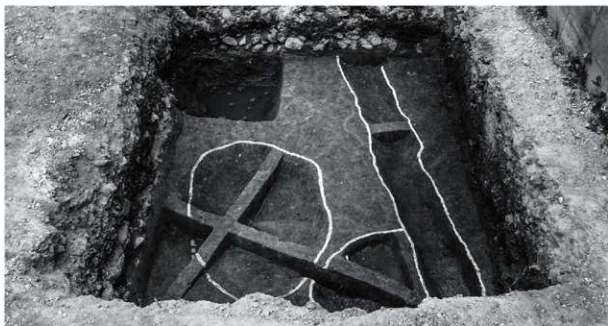
(3) 第1トレンチ SP-9土層断面



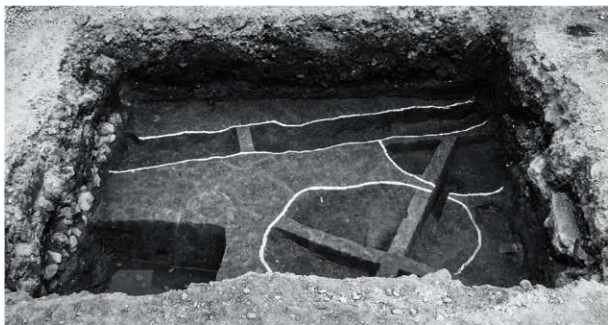
(4) 第1トレンチ 井戸1



(5) 第1トレンチ全景（掘削後）



(1) 第2トレンチ第1面全景 (南から)



(2) 第2トレンチ第1面全景 (西から)



(3) 第2トレンチ第1面 溝1土層断面



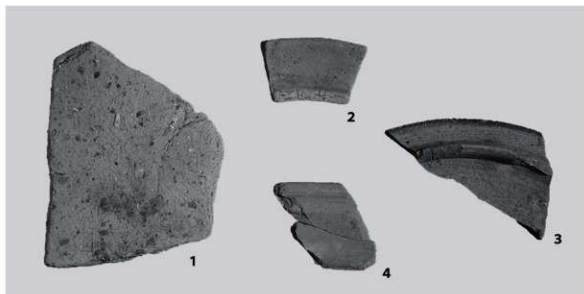
(4) 第2トレンチ第1面 土坑1



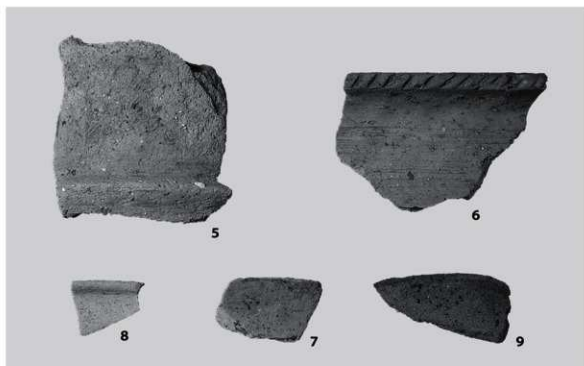
(1) 第2トレンチ第2面全景 (掘削前)



(2) 第2トレンチ第2面全景 (掘削後)



(1) 第1トレンチ 土坑1出土遺物



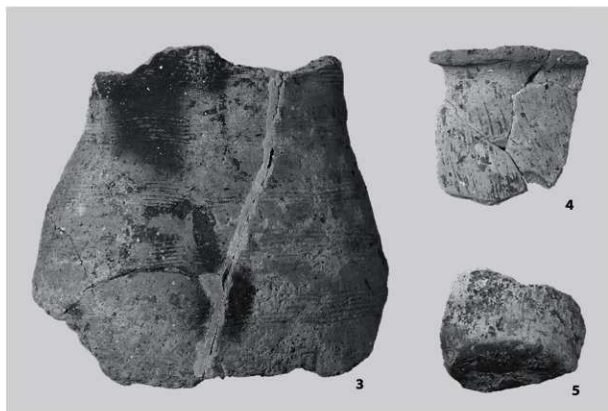
(2) 第1トレンチ SP-9 出土遺物



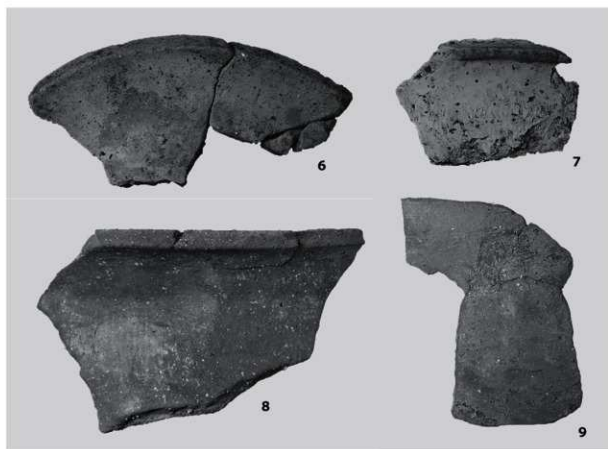
(3) 第2トレンチ 溝1出土遺物



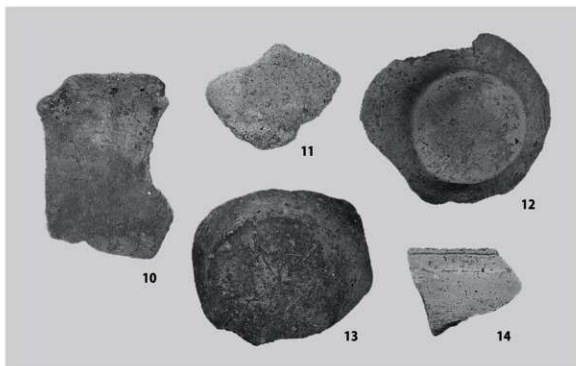
(4) 第2トレンチ 溝2出土遺物



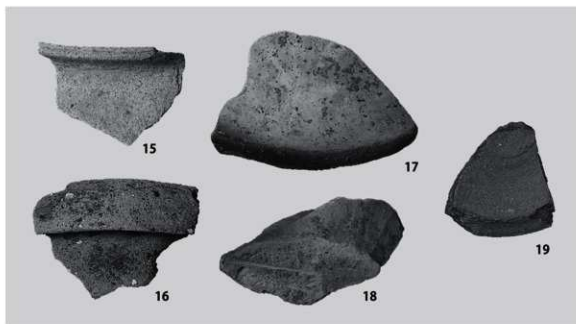
(1) 第2トレンチ 土坑1出土遺物



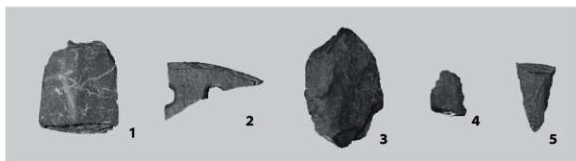
(2) 第2トレンチ 土坑2出土遺物



(1) 第 2 トレンチ 土坑 2 出土遺物



(2) その他の土器



(3) 石器

報告書抄録

ふ り が な	とよなかしまいぞうふんかさいはつくつちようさがいよう					
書 名	豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 令和元年度（2019 年度）					
シ リーズ 名	豊中市文化財調査報告（シリーズ番号 第 81 集）					
編 著 者	橘田正徳 小堀 僚 服部聡志 浅田尚子					
編 集 機 関	豊中市教育委員会事務局（市町村コード 27208）					
所 在 地	〒 561－8501 大阪府豊中市中樞塚 3 丁目 1－1 TEL06－6858－2581					
発 行 年 月 日	令和 2 年（2020 年）3 月 31 日					
所収遺跡	所在地	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
曽根遺跡 第 14 次調査	曽根西町 3－212・213	34°46′9″	135°28′3″	20180801 ～ 20180926	291.61 m ²	共同住宅建築
桜塚古墳群 第 14 次調査	中樞塚 2－118－5	34°46′39″	135°28′11″	20190218 ～ 20190315	40.0 m ²	個人住宅建築
北刀根山遺跡 第 2 次調査	刀根山元町 175・175－2・ 176の各一部	34°47′45″	135°27′36″	20190513 ～ 20190604	54.94 m ²	個人住宅建築
新免遺跡 第 73 次調査	玉井町 3－60	34°46′59″	135°27′21″	20190527 ～ 20190614	31.36 m ²	個人住宅建築

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
曽根遺跡 第 14 次調査	集落跡	弥生～中世	掘立柱建物・竪 穴式住居等	弥生土器・土師 器・須恵器等	弥生時代の住居、平安時代中期の超 大型建物群の一部を構成する建物を 検出。灰釉陶器磁字破などが出土。
桜塚古墳群 第 14 次調査	古墳	古墳	柱穴等	陶磁器	耕作痕・近世の可能性のある柱穴を 検出。
北刀根山遺跡 第 2 次調査	集落跡	中世 近世	土坑群・柱穴	土師器・陶器	埋蔵遺構の可能性のある中世後期の 土坑群・焼失した建物の柱穴を検出。
新免遺跡 第 73 次調査	集落跡 古墳	縄文～中世	土坑・柱穴	弥生土器・土師器・ 須恵器・石器等	弥生～古墳時代の遺構、近世の井戸 の可能性のある土坑等を検出。

豊中市文化財調査報告 第81集

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

令和元年度（2019年度）

発行：豊中市教育委員会事務局

豊中市中桜塚3丁目1-1

令和2年（2020年）3月31日

印刷：株式会社きたがわぶりと